

江戸川区ひきこもり調査結果の報告書

令和 2年 3月 12日

江 戸 川 区

目次

第1章 調査の概要	P. 1
1 はじめに	P. 1
2 調査方法	P. 1
第2章 調査結果	P. 2
第1節 概要	P. 2
第2節 傾向と考察	P. 4
1 集計から見える傾向	P. 4
(1) 「性別」と「当事者の年齢」	P. 4
(2) 「同居家族」と「ひきこもり期間」	P. 5
(3) 「ひきこもり状態になったきっかけ」と「現在の年齢」	P. 6
(4) 「現在相談（支援）を受けているか」	P. 8
(5) 「問題点があるとしたら」と「どこで知ったか」	P. 8
(6) 「関わり」と「職位」	P. 9
2 自由意見から見える傾向と求められていること	P. 10
(1) 相談先について	P. 10
(2) 支援について	P. 12
(3) 行政の在り方について	P. 14
(4) 経済的な不安について	P. 14
(5) 家族等の負担について	P. 15
(6) 情報について	P. 15
(7) 当事者の年代別による意見	P. 16
(8) 当事者の同居家族の有無による意見	P. 17
(9) 当事者のひきこもり状態の期間別による意見	P. 18
第3節 まとめ	P. 19
第3章 資料編	P. 20
第1節 インターネット調査	P. 20
1 「ひきこもり状態にある人」について	P. 20
2 自由意見	P. 25
第2節 関係機関調査	P. 29
1 回答者について	P. 29
2 「ひきこもり状態にある人」について	P. 32
3 自由意見	P. 37
第3節 区職員調査	P. 41
1 回答者について	P. 41
2 「ひきこもり状態にある人」について	P. 43
3 自由意見	P. 48
本報告書に関する留意点	P. 49

第1章 調査の概要

1 はじめに

近年の報道等で一部の偏見や、「8050問題」にみられる当事者・親の高齢化が進行している現在、様々な分野、特に介護、保健、生活支援、就労支援などにおける課題の一つとなっているのが「ひきこもり」の問題である。この目に見えづらい社会問題を少しでも明白にして新たな施策を検討する段階にまできている。ただ「何をすべきか」の前に「どういう状況で何が必要なのか」という根本的な部分から区として把握する必要があった。

そこで、区内において「ひきこもり」に関わっている関係機関、区職員を対象に実態把握を行い、今後の施策を検討する際の参考とすることにした。また、この調査の実施を公表し、併せて不特定の方を対象としたインターネットを用いた調査の実施もアナウンスすることで、当事者または親族の方の直接の「声」を把握していくことも狙いの一つとした。

厚生労働省はひきこもりについて、「仕事や学校にいかず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせずに6か月以上続けて自宅に引きこもっている状態」と定義しているが、本書においては、より多くの回答や多様な意見を得るために、上記の定義にとらわれず、各回答者において「ひきこもりと思われる人」を「ひきこもり状態にある人」として回答を募っており、全ての人が上述した定義に当てはまらない可能性があることを留意願いたい。

2 調査方法

(1) インターネット調査

調査方法	区ホームページに専用フォームを開設し回答を募った
調査期間	令和元年10月1日から同月31日
回答者数	67名

(2) 関係機関調査

調査対象者	民生児童委員、主任児童委員、熟年相談室職員、居宅介護支援事業所職員 相談専門支援員、地域活動支援センター職員、なごみの家職員
調査方法	調査対象者に調査用紙を郵送し回答を求めた
調査期間	令和元年9月1日から同年10月1日
回収結果	配布数 671枚、回収数 503枚 ※回収率 75.0%

(3) 区職員調査

調査対象者	ひきこもり状態にある人を担当する可能性がある職員 福祉部：障害者福祉課、生活援護第一課～第三課 健康部：健康サービス課、保健予防課
調査方法	調査対象者にメールを送付し回答を求めた
調査期間	令和元年10月15日から同月31日
回答者数	277名

第2章 調査結果

第1節 概要

調査により把握できた当事者は、インターネット調査 67 名、関係機関調査 331 名、区職員調査 283 名の計 681 名（重複の可能性あり）であった。

ひきこもり当事者には若年層よりも中年層が多く、同居の親族がいる場合が大多数を占めた。加えて、疾病をきっかけにひきこもり状態になる傾向であることがうかがえる。

各調査項目で最も多かった回答

当事者の年齢 : 40代 当事者の性別 : 男 同居の家族 : 有
ひきこもり状態の期間 : 2年～9年 ひきこもり状態になったきっかけ : 疾病

項目 1	項目 2	当事者 家族等	関係機関	区職員	計	
当事者の年齢	未成年	9	64	56	129	18.9%
	20代	12	27	64	103	15.1%
	30代	12	50	48	110	16.2%
	40代	21	87	56	164	24.1%
	50代	10	77	49	136	20.0%
	60歳以上	3	17	8	28	4.1%
	わからない		9	1	10	1.5%
	未回答	0	0	1	1	0.1%
当事者の性別	男	40	235	190	465	68.3%
	女	21	85	93	199	29.2%
	わからない	6	6	0	12	1.8%
	未回答	0	5	0	5	0.7%
同居の家族の有無	有	55	276	224	555	81.5%
	一人暮らし	11	45	59	115	16.9%
	未回答	1	10	0	11	1.6%
ひきこもり状態の期間	1年未満	10	26	31	67	9.8%
	2～9年	32	99	129	260	38.2%
	10～20年	18	77	46	141	20.7%
	21年以上	5	30	22	57	8.4%
	わからない	1	93	53	147	21.6%
	未回答	1	6	2	9	1.3%
ひきこもり状態になったきっかけ (複数回答可)	不登校	31	70	83	184	
	失業・退職	29	70	44	143	
	疾病	36	82	70	188	
	その他	36	31	26	93	
	わからない	11	91	58	160	

数多く寄せられた自由意見について回答者を「当事者」「家族等」「関係機関・区職員」に分類したうえで、集まった意見を次のように整理した。

ひきこもり当事者

- 「自立に向けたサポートがほしい」「社会とのつながりを持ちたい」等
・・・社会復帰に関する意見 21件
- 「気軽に集まって話ができる場所がほしい」「相談できる窓口がほしい」等
・・・相談先に関する意見 16件
- 「親のお金で生活している」「これからの生活が心配」等
・・・経済的な不安に関する意見 14件
- 「話を聞いてもらえない」「たらい回しにしないでほしい」等
・・・行政への要望に関する意見 8件

家族等

- 「家族だけでの支援は困難」「本人に自覚がないため支援が困難」等
・・・支援方法に関する意見 19件
- 「親同士が悩みを共有できる場所がほしい」「相談しやすい窓口がほしい」等
・・・相談先に関する意見 12件
- 「家族も苦しんでいる」「家族だけでの解決は困難」等
・・・家族等の負担に関する意見 8件

関係機関・区職員

- 「講習会や講演会があれば参加したい」「専門知識がある人が対応すべき」等
・・・支援方法に関する意見 144件
- 「当事者を把握することが困難」「関係機関間で情報共有する場が必要」
・・・当事者の把握や情報に関する意見 121件
- 「どこに相談したら良いか知りたい」「窓口がわかりにくい」等
・・・相談先に関する意見 75件
- 「当事者を見つけることは困難」「問題意識の無い当事者、家族等もいる」等
・・・当事者や家族等に関する意見 71件

▽当事者からは「社会復帰」、家族等・関係機関・区職員からは「支援方法」に関する意見があり、現状に不安を感じていることがわかった。

▽どの調査においても「相談先」について意見があり、「相談先の明確化」を求める声が多かった。同時に当事者、家族等はともに悩みを共有できる「居場所」を求めていることがわかった。

▽当事者からは行政に対して「話を聞いてもらいたい」との要望がある一方で、関係機関・区職員からは「当事者を把握したい」「情報がほしい」といった声が寄せられ、意見がすれ違う結果となった。

第2節 傾向と考察

1 集計から見える傾向

(1) 「性別」と「当事者の年齢」(40代男性が最も多い)

当事者・家族等、関係機関調査では男女とも「40代」が最も多く、ひきこもり＝若年層というイメージがあった以前とは異なり、30歳以上の当事者が一定数いることが確認された。一方で、職員調査では男女とも「20代」が最も多かった。ほとんどの年代において、女性より「男性」が多い結果となった。

● 当事者・家族等

年齢 性別	7～15 歳	16～ 19歳	20～ 29歳	30～ 39歳	40～ 49歳	50～ 59歳	60～ 64歳	65歳 以上	計
男	3	3	9	7	11	7	0	0	40
女	1	1	2	4	10	1	2	0	21
わからない	1	0	1	1	0	2	0	1	6
計	5	4	12	12	21	10	2	1	67

※当事者の性別（第3章第1節1（3））の集計結果と年齢（同節1（2））の集計結果を掛け合わせて集計している

● 関係機関

年齢 性別	未成年 (小中 学生)	未成年 (高校 生以上)	20代	30代	40代	50代	60～ 64歳	不明	計
男	26	14	19	34	67	56	14	5	235
女	13	8	5	16	18	16	3	3	82
わからない	1	0	1	0	0	3	0	1	6
計	40	22	25	50	85	75	17	9	323

※当事者の性別（第3章第2節2（2））の集計結果と年齢（同節2（1））の集計結果を掛け合わせて集計している

● 区職員

年齢 性別	未成年 (小中 学生)	未成年 (高校 生以上)	20代	30代	40代	50代	60～ 64歳	不明	計
男	22	14	43	32	38	34	6	1	190
女	16	4	21	16	18	15	2	0	92
わからない	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	38	18	64	48	56	49	8	1	282

※当事者の性別（第3章第3節2（2））の集計結果と年齢（同節2（1））の集計結果を掛け合わせて集計している

(2) 「同居家族」と「ひきこもり期間」

(父母との同居が多く、その期間にはばらつきが見られた)

どの調査においても、「**父母**」との同居が多かった。「父母」と同居している当事者のひきこもり状態の期間について、当事者・家族等、関係機関調査では「10～20年」が多かったのに対して、区職員調査では「2～5年」が最も多かった。

「一人暮らし」の当事者のひきこもり状態の期間について、当事者・家族等、区職員調査では期間が比較的短期間であったのに対して、関係機関調査では「10～20年」が最も多かった。

● 当事者・家族等

期間	1年未満	2～5年	6～9年	10～20年	21年以上	わからない	計
同居家族							
父母	5	10	13	15	5	0	48
祖父母	0	1	0	0	0	0	1
子・孫	0	1	1	1	0	0	3
兄弟	3	5	3	6	1	0	18
一人暮らし	3	3	3	1	0	1	11
その他	1	2	1	2	0	0	6
計	12	22	21	25	6	1	87

※当事者の同居家族（第3章第1節1（4））の集計結果とひきこもり状態の期間（同節1（5））の集計結果を掛け合わせて集計している

※同居家族については複数回答可

● 関係機関

期間	1年未満	2～5年	6～9年	10～20年	21年以上	わからない	計
同居家族							
父母	19	46	15	48	18	67	213
祖父母	2	12	0	7	0	3	24
子・孫	0	6	3	5	1	1	16
兄弟	9	11	6	9	3	20	58
一人暮らし	2	3	6	13	5	16	45
その他	1	4	3	4	1	0	13
計	33	82	33	86	28	107	369

※当事者の同居家族（第3章第2節2（3））の集計結果とひきこもり状態の期間（同節2（4））の集計結果を掛け合わせて集計している

※同居家族については複数回答可

● 区職員

期間 同居家族	1年未満	2～5年	6～9年	10～20年	21年以上	わからない	計
父母	23	69	22	30	14	32	190
祖父母	0	1	0	1	0	0	2
子・孫	0	4	0	0	0	2	6
兄弟	0	0	2	5	2	1	10
一人暮らし	6	19	6	9	5	14	59
その他	2	4	2	1	1	4	14
計	31	97	32	46	22	53	281

※当事者の同居家族（第3章第3節2（3））の集計結果とひきこもり状態の期間（同節2（4））の集計結果を掛け合わせて集計している

(3) 「ひきこもり状態になったきっかけ」と「現在の年齢」
(未成年は不登校が多く、20代以上は疾病が多い)

どの調査においても、未成年については「**不登校**」をきっかけとしている人が多かった。一方、20代以上については「**疾病**」をきっかけとしている人が多かった。また、20代以上の人についても「不登校」をきっかけとしている人が一定数存在し、ひきこもり状態が長期化していることがうかがえる。

● 当事者・家族等

年齢 きっかけ	7～15歳	16～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～64歳	65歳以上	計
不登校（小学校）	4	1	1	0	2	1	1	0	10
不登校（中学校）	2	3	3	2	3	1	0	0	14
不登校（高校）	0	2	2	2	0	1	0	0	7
性格的なもの	1	0	2	2	4	2	0	0	11
職場になじめず	0	0	1	1	5	2	0	1	10
就職の失敗	0	0	4	3	3	2	1	0	13
疾病（精神的）	0	1	3	6	12	7	0	0	29
疾病（けが等）	0	0	0	1	4	2	0	0	7
失業・退職	0	0	2	3	8	6	0	0	19
事故や犯罪被害	0	0	0	0	1	1	0	0	2
わからない	1	0	2	2	6	0	0	0	11
その他	0	0	1	0	4	5	0	0	10
計	8	7	21	22	52	30	2	1	143

※当事者のひきこもり状態になったきっかけ（第3章第1節1（6））の集計結果と年齢（同節（2））の集計結果を掛け合わせて集計している。 ※きっかけについては複数回答可

● 関係機関

年齢 きっかけ	未成年 (小中 学生)	未成年 (高校 生以上)	20代	30代	40代	50代	60~ 64歳	不明	計
不登校	32	15	13	4	2	3	1	0	70
受験失敗	0	1	0	2	0	0	0	0	3
失業・退職	0	1	4	12	22	16	7	0	62
疾病	3	1	1	12	25	27	4	1	74
わからない	3	3	7	17	32	16	4	7	89
その他	1	0	1	2	5	14	1	1	25
計	39	21	26	49	86	76	17	9	323

※当事者がひきこもり状態になったきっかけ（第3章第2節2（5））の集計結果と当事者の年齢（同節2（1））の集計結果を掛け合わせて集計している

※きっかけについては複数回答可

● 区職員

年齢 きっかけ	未成年 (小中 学生)	未成年 (高校 生以上)	20代	30代	40代	50代	60~ 64歳	不明	計
不登校	36	14	19	9	4	1	0	0	83
受験失敗	0	1	1	0	0	0	0	0	2
失業・退職	0	1	7	10	14	11	0	1	44
疾病	1	1	19	10	16	18	5	0	70
わからない	1	0	9	13	19	13	2	0	57
その他	0	1	9	6	3	6	1	0	26
計	38	18	64	48	56	49	8	1	282

※当事者のひきこもり状態になったきっかけ（第3章第3節2（5））の集計結果と年齢（同節2（1））の集計結果を掛け合わせて集計している

※きっかけについては複数回答可

(4) 「現在相談（支援）を受けているか」（明確な相談先を求める意見が多い）

当事者・家族等ともに、今現在ひきこもり状態であると認識があるものの、**相談または支援を受けることができている**現状がある。さらに、両者ともに、相談するにしても**どこに相談すべきかわからない**と、明確な相談先を求める意見が寄せられた。

● 当事者・家族等

回答者	相談について	受けている	受けていない	受けてみたい	相談先がわからない	わからない	計
ひきこもり状態の方		8	15	1	7	1	32
ご家族の方		4	11	3	6	1	25
区民		0	0	0	0	1	1
近隣の方		0	1	0	0	1	2
ご親族		0	1	1	0	1	3
その他		0	0	1	0	1	2
計		12	28	6	13	6	65

※調査回答者（第3章第1節1（1））の結果と当事者の相談（支援）の状況（同節1（8））の結果を掛け合わせて集計している

(5) 「問題点があるとしたら」と「どこで知ったか」（窓口機能の強化が必要）

区職員においては、**家族の相談、仕事(訪問)**は貴重な情報源となっており、これらの情報を受け止める窓口機能の強化が必要となる。また、「親族の高齢化」「経済的困窮」「就労先がない」と生活の貧困に結びつく内容に対する回答が多かった。

● 区職員

問題点	どこで知ったか	家族の相談	近所からの情報	仕事(訪問等)	その他	計
家庭内暴力等が心配		20	0	5	2	27
親族の高齢化		35	0	24	6	65
徘徊・騒音等不審な行動		2	1	2	0	5
経済的困窮		13	0	8	3	24
就労先がない		20	1	23	6	50
その他		55	2	45	10	112
計		145	4	107	27	283

※回答者が当事者をどのようにして知ったか（第3章第3節2（6））の集計結果と当事者の抱える問題点（同節2（7））の集計結果を掛け合わせて集計している

(6) 「関わり」と「職位」(相談窓口の明確化が必要)

ひきこもり状態の相談窓口について、民生・児童委員で紹介したことがあるのは268件中14件と少ない割合であった。民生・児童委員を筆頭に関係機関へ相談窓口を明確にしていくことが必要であると考えられる。

● 関係機関

関わり \ 職位	民生・児童委員	主任児童委員	熟年相談室	居宅介護支援事業所	相談専門支援員	その他	計
日頃からひきこもり状態にある方やご家族に声をかけている	15	1	7	22	12	7	64
日頃からひきこもり状態にある方やご家族の相談に応じている	7	1	9	20	8	12	57
相談窓口を紹介したことがある	14	2	14	17	10	7	64
ひきこもり状態であることを公言されていないので、見守りを続けている	35	0	6	22	8	4	75
ひきこもり状態にある方に関する情報が少ない	135	5	7	25	3	5	180
いることは分かっているが、会うことができない	28	4	4	16	4	4	60
あまり関わりたくない	13	0	0	2	0	0	15
その他	21	2	1	8	7	0	39
計	268	15	48	132	52	39	554

※回答者の職位(第3章第2節1(1))の集計結果と当事者への関わり(同節1(4))の集計結果を掛け合わせて集計している

※関わりについては複数回答可

2 自由意見から見える傾向と求められていること

(1) 相談先について

いずれの調査先からも相談先に関する意見が寄せられていた。当事者からは、相談先を求める声がある一方で、相談することへの不安に対する声もあった。家族等においても同様に、自身の悩みを相談し共有できる場を求める声があった。

関係機関からは、相談先を明確化して周知すべきといった意見や相談先の在り方に対しての意見が多数寄せられていた。区職員からは、当事者を専門に支援する窓口を求める意見があった。

● 当事者からの意見

主な意見
<ul style="list-style-type: none">・なんでもいいから気軽に話ができる場所がほしい・同じ境遇の人と話してみたい・相談したくても話すことや、外出することが怖い・相談しても就労を強要されるのではという不安・自身が病気であるかもしれないという不安・どうしたら良いかわからない
求められていること
<ul style="list-style-type: none">○<u>年齢・経歴関係なく気軽に相談できる窓口</u>○<u>あらゆる不安について相談する機会</u>○<u>当事者同士で話しをする機会・居場所</u>

● 家族等からの意見

主な意見
<ul style="list-style-type: none">・相談しても、たらい回しにされる不安・同じ悩みを共有できる場所がほしい・どこに相談したら良いかわからない・家族としては恥ずかしい気持ちがあり相談できない・外に出られない（出たがらない）当事者のために、家に来て相談に乗ってほしい・ひきこもりに対処するための知識がない、学習する機会がほしい
求められていること
<ul style="list-style-type: none">○<u>家族としての悩みを相談する場所</u>○<u>同じ悩みを共有し情報交換できる場所</u>○<u>他人の目を気にせず、相談できる場所</u>○<u>当事者を支えるための知識を得られる機会</u>

● 関係機関からの意見

主な意見
<ul style="list-style-type: none"> ・ いろいろな窓口があってわかりにくい ・ 年代別で窓口が違うのか ・ 最初の窓口がわからず、たらいまわしにされ抱え込んでしまった ・ どの段階でどこに相談したらよいか ・ 窓口についてもっと詳しく知りたい ・ 相談や連携の窓口があるのであれば教えてほしい ・ 現在ひきこもり状態にない人にも知らせることが大事 ・ 相談先を周知すれば気に留める人がいる ・ 本人に意思がないと支援は難しいと言われた ・ 窓口に来てほしいと言われたが、訪問はできないか ・ 相談したが、具体的な方策はなかった
求められていること
<ul style="list-style-type: none"> ○ 最初の相談窓口の一本化 ○ インターネットや広報紙を用いた相談先の周知 ○ 当事者以外からの相談でも対応できる体制

● 区職員からの意見

主な意見
<ul style="list-style-type: none"> ・ 関わり始めたばかりでどのような関係機関と連携すべきか不明 ・ 自分一人では積極的に介入できないため他の相談先がほしい ・ 担当が1～2年で変わり関係構築が困難 ・ ひきこもり問題に対する明確な方法が不明 ・ 本人が相談する意思がないため支援できない
求められていること
<ul style="list-style-type: none"> ○ あらゆる不安について相談する機会・居場所 ○ ひきこもり専門窓口の設置 ○ 気軽に相談できる窓口

(2) 支援について

当事者からは、社会復帰への支援、とりわけ、就労の支援に関する意見が多く寄せられた。家族等からは、家族だけでは支援できない、本人に意欲がないため支援が困難との意見が見られた。関係機関からは多くの意見が寄せられており、その中でも支援方法について学びたいとの意見が目立った。区職員からは、支援方法に苦悩する声があった。

● 当事者からの意見

主な意見
【就労】 <ul style="list-style-type: none">・就労する自信がない（病気、年齢、経験、ブランク等）・雇われることに抵抗がある（仕事、就職活動での挫折）・家で就労できたらよい・簡単な仕事から始めてみたい、自分のペースで仕事がしたい 【就労以外】 <ul style="list-style-type: none">・人との会話や体力に自信がない・社会とのつながりを持ちたいと思う
求められていること
【就労】 <ul style="list-style-type: none">○<u>求職活動・就労をするための訓練</u>○<u>その人に合わせた段階的な支援</u>○<u>病気・障害でも働ける就労先の案内</u>○<u>在宅での就労方法の提案</u> 【就労以外】 <ul style="list-style-type: none">○<u>会話や体力作りを目的とした訓練</u>○<u>日中活動やボランティア活動の提案</u>

● 家族等からの意見

主な意見
<ul style="list-style-type: none">・家族だけでは解決はできない・外に連れ出すきっかけがほしい・当事者本人にその気がないため支援が難しい・何か社会との繋がりは持ってもらいたい・コミュニケーションが取れない・社会復帰するにはどうすれば良いのか
求められていること
<ul style="list-style-type: none">○<u>家族以外の協力者</u>○<u>外へ連れ出すきっかけ作り</u>○<u>コミュニケーションの取り方を学ぶ場</u>○<u>社会とのつながりを持つためのきっかけ作り</u>

● 関係機関からの意見

主な意見
<ul style="list-style-type: none">・ 民生・児童委員 1 人で訪問に行くのは難しい・ 対応する知識・技術がないので行政等に取り次ぐことしかできない・ 素人には無理・ パターン化してそれぞれに対応を考えたほうがよい・ 経験がなく初動をどうすればよいかわからないので知りたい・ 支援者の携わり方について、解決された例を通して教えてほしい・ どのような支援が可能か知ることができれば声かけしやすい・ 支援・関わりをどうしたらよいのか具体的なシステムを知りたい・ 就労支援も含めたサポートを得られるとよい・ 相談は第一歩だが、その先の支援が必要・ 継続して支援できる人がいない・ ひきこもり状態の方はケアマネとして支援している本人の家族なのでどう関わるのが良いかわからない
求められていること
<ul style="list-style-type: none">○ 原因に応じた支援方針の策定○ 専門性を有した職員の配置○ 成功事例の集約○ 自立に向けた支援方法の体系化○ 支援方法に関するフローチャートやマニュアルの作成○ 支援方法に関する講習会の開催

● 区職員からの意見

主な意見
<ul style="list-style-type: none">・ 医師から刺激しないように指示が出ていて積極的な支援が困難・ 本人の問題意識が無くどのように支援すればいいかわからない・ 家族が問題を隠してしまう・ 本人へ話をすると暴力的になり解決の糸口がつかめない・ 他の機関と支援について情報交換を行っている・ 約束のキャンセルが多く、当事者に会うことが困難
求められていること
<ul style="list-style-type: none">○ 関係機関との連携体制の確立○ 問題意識の無い当事者、家族等への対応○ その人に合わせた段階的な支援○ 当事者家族への支援方法を学ぶ場

(3) 行政の在り方について

当事者からは、親身に相談に乗ってもらえないイメージがあるとの意見があった。一方、関係機関からは、実際に相談したものの対応がなかったといった意見が寄せられていた。

● 当事者からの意見

主な意見
<ul style="list-style-type: none">・ひきこもりの専用窓口を作ってほしい・行政の広報紙に相談先の案内があると良い・行政には親身に相談に乗ってもらえないイメージがある
求められていること
<ul style="list-style-type: none">○ひきこもり専門窓口の設置○窓口の広報活動○行政側の意識改善

● 関係機関からの意見

主な意見
<ul style="list-style-type: none">・相談済みだが対応がない・定期的な訪問を行ってくれる係があるのか不明・行政だけでは大変だと思うので、委託先や協力先を決めて対応する
求められていること
<ul style="list-style-type: none">○行政で対応できることとできないことの明確化とその周知○関係機関と連携協働できる体制づくり

(4) 経済的な不安について

生活費の確保が難しく、結果として親の年金や給料で生活している状態から抜け出せないでいるとの声が寄せられていた。

● 当事者からの意見

主な意見
<ul style="list-style-type: none">・生活費や通院費用が無い、借金をしている・親のお金で生活している、親亡き後の生活が心配
求められていること
<ul style="list-style-type: none">○経済的な不安を相談できる場所○区貸付・生活保護制度への案内と申請補助○医療費・カウンセリング費用の助成

(5) 家族等の負担について

支援することの負担を訴える声がある一方で、講演会等の学習機会を求める声もあった。

● 家族等からの意見

主な意見
<ul style="list-style-type: none">・長年支えてきたが先が見えない不安・講演会等があれば話しを聞いてみたい・当事者からの暴力に対する不安・一部親族の無関心が他の親族への負担となっている・高齢である親自身の経済的負担
求められていること
<ul style="list-style-type: none">○支える側の親族への支援○ひきこもりに対する知識

(6) 情報について

当事者の情報がなく把握が困難であるが、情報があれば協力可能であるといった意見が寄せられていた。

● 関係機関からの意見

主な意見
<ul style="list-style-type: none">・なかなか把握することができない・特に成人した以降は把握することが困難・民生委員が情報を把握することには限界がある・行政からの情報がないため、あれば提供してほしい・情報があれば見守り声かけすることができる
求められていること
<ul style="list-style-type: none">○情報共有できる仕組みづくり

(7) 当事者の年代別による意見

7～19歳では不登校に関する悩みがある一方で、20歳以上になると社会復帰への支援を求める意見、30歳以上になるとひきこもり期間の長期化や、高齢になる両親についての不安を訴える意見があった。

● 7～19歳（未成年）

主な意見
<ul style="list-style-type: none">・ 早い段階で専門家のアドバイスが欲しかった・ いじめが原因で学校に登校できていない・ どこに相談したらよいかわからない・ 外に出ることができず悩んでいる
求められていること
○専門家からの支援 ○不登校に対する支援 ○明確な相談先

● 20～29歳

主な意見
<ul style="list-style-type: none">・ 金銭面の不安・ ひきこもり相談の専門窓口を作ってほしい・ 共感してもらえる場所がほしい・ 仕事をしたいが、その前の準備が必要・ 長い間家から出来ていないため、少しずつ人と話しをしたい
求められていること
○経済面での支援 ○明確な相談先と居場所 ○社会復帰に向けた段階的な支援

● 30歳以上

主な意見
<ul style="list-style-type: none">・ ひきこもり状態が長期化している・ 社会にでて自立できるようサポートがほしい・ 年齢があがるとますます就職の機会がなくなる・ 何をしてもお金がかかるため、お金の支援が必要・ 両親が高齢であることが不安・ 集まってなごめる場所がほしい・ 年齢制限のない相談しやすい場所がほしい
求められていること
○社会復帰に向けたサポート ○経済面での支援 ○年齢、ひきこもり期間にかかわらず相談しやすい窓口、居場所

(8) 当事者の同居家族の有無による意見

同居している人がいる、同居している人がいないに関わらず悩みは共通であった。一方で同居している当事者は同居している家族の理解を求める意見が一部あった。

● 同居している人がいる

主な意見
<ul style="list-style-type: none">・ 年齢制限の無く相談しやすい場所や就労支援先がほしい・ 在宅でできる仕事を紹介してほしい・ 社会に出るチャンスがほしい・ 社会に出たくても緊張と不安が酷く最初の一步を踏み出せない・ 何度でも何歳からでもやり直せる社会を作ってほしい・ どこへ相談すればいいか悩み苦しんでいる・ 通院や役所へ行くにもお金がかかるので経済的支援をしてほしい・ 親が亡くなったら将来が心配・ ひきこもりが自分だけでないことを親に知ってほしい
求められていること
<ul style="list-style-type: none">○ 年齢・経歴関係なく気軽に相談できる窓口○ 求職活動・就労をするための訓練や在宅での就労方法の提案○ 区貸付・生活保護制度への案内と申請補助○ 親族のひきこもり当事者に対する理解の場

● 同居している人がいない

主な意見
<ul style="list-style-type: none">・ 身内や友人など相談できる人がいない・ 親の仕送りで生活しているため、親が死んだらどうしていいかわからない・ 人間関係が原因で鬱になり通院中、外出するのが怖いので在宅ワークができれば・ 楽しく話をしてくれる人や、気軽に始められるアルバイトがあればいい・ 買い物に外出するのも困難・ 地域に近く、気軽に選べる運動プログラムがほしい
求められていること
<ul style="list-style-type: none">○ 年齢・経歴関係なく気軽に相談できる窓口○ あらゆる不安について相談する機会○ 経済的な不安を相談できる場所○ 求職活動・就労をするための訓練や在宅での就労方法の提案

(9) 当事者のひきこもり状態の期間別による意見

どの期間の当事者からも、社会に踏み出すことへの不安を抱いているとの意見があった。その一方で、ひきこもり状態の期間にかかわらず、就労等それぞれの自立に向けた意見が寄せられていた。

● 1年未満

主な意見
<ul style="list-style-type: none">・なんでもいいから気軽に話ができる場所がほしい・お金がなく不安が増すばかり・社会に出たくても、不安と緊張が酷い・在宅で出来る仕事とか紹介して頂きたい
求められていること
○気軽に相談できる窓口 ○社会復帰へのきっかけづくり

● 2～9年

主な意見
<ul style="list-style-type: none">・ひきこもり状態で運動不足、運動のプログラムがあれば・なんでもいいから話を聞いてくれる人がいてほしい・楽しそうに話してくれる人と気軽に始められる仕事が大いに役立った・外に出るのが怖い、対人関係が怖い・相談すると嫌味を言われる、小言を言われる気がする・通院や診断書取得に必要な金銭面の支援・自分に障害があると知り、就労に対して前向きになった
求められていること
○会話や体力作りを目的とした催し ○社会参加への恐怖心を和らげる仕組みづくり ○当事者の状況に応じた就労支援

● 10年以上

主な意見
<ul style="list-style-type: none">・お金の支援が必要・社会にでるチャンスがほしい・もう親からは何も言われなくなった・年齢制限のない相談しやすい場所や就労支援のなどがあるとありがたい・このままではいけないと思いつつ、なかなか最初の一步を踏み出すことができない・親が居なくなったらどうしたら良いかと言う心配が大いにある
求められていること
○経済面での支援 ○社会復帰に向けたサポート ○年齢制限のない相談場所や就労支援

第3節 まとめ

ここまで、調査結果を掛け合わせて集計することにより、当事者や当事者に関わる人の状況について考察した。また、「当事者・家族等」、「関係機関」、「区職員」、それぞれの自由意見を整理することにより、当事者を支援するために必要とされていることを考察した。これらを基に、本区においてひきこもりに関する施策を講じるにあたり今後考えていくべきことを、4つのキーワードに分けて記載する。

■ 相談先の明確化

全てのグループから「相談先がわからない」として、相談先を明確にすることを求める意見が寄せられた。相談先が不明であることが、ひきこもり当事者・家族の足を遠のかせ、ひきこもり期間が長期化する原因となっている可能性が考えられる。誰もがひきこもりに関するあらゆる悩みを気軽に相談し、社会復帰に向けた第一歩を踏み出せるような環境をつくることが求められている。

■ 当事者への支援充実(社会復帰への不安解消)

ひきこもりに対する支援と聞いたときに、「無理やり就労させられてしまう」というマイナスな思考へつながるといった声があった。一方で、就労以前に「人と話すことから始めたい」という他者との関わりを持つための訓練を希望する声もある。社会復帰への不安解消を図るために、まずは当事者自身が何を目標しているか、何から始めたいのかを聞き取り、その人に合わせた段階的な支援をする環境が必要とされている。

■ 家族への支援充実

当事者が支援を必要としている一方で、その家族も「どうしたらよいかわからない」「長年支えてきたが半ば諦めている、疲れた」と大きな不安を抱え、何らかの支援を求めている実情がある。調査結果からも「一人暮らし」の当事者よりも「家族と暮らす」当事者のほうが多く、ひきこもりに対する知識や経験が無く、先の見えない状態に途方にくれている家族が多く存在する。家族の不安解消に向けて、「同じ悩みを話し合える場所を」という声が多数あり、情報交換する機会や学習の場が必要とされている。

■ 協力して当事者を支える体制づくり

当事者にとって、周りの理解や支えは不可欠であり、関係機関からは「協力したい」といった多くの積極的な意見があった一方で、「当事者の情報がない」、「当事者のことを知りたい」、「どのように支援したらよいかわからない」という情報共有の場や学習の機会を求める意見も寄せられた。これらの声を生かし、施策に反映させていくことで、垣根を超えた新しい支援の形へと繋がり、当事者を支えていく体制となることが期待できる。

第3章 資料編

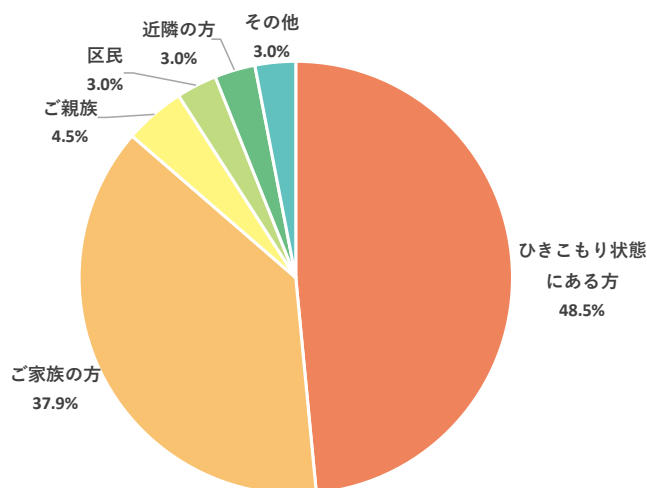
第1節 インターネット調査

1 「ひきこもり状態にある人」について

(1) 回答者

・半数近くはひきこもり状態にある当事者からの回答であり、約4割はその家族からの回答であった。

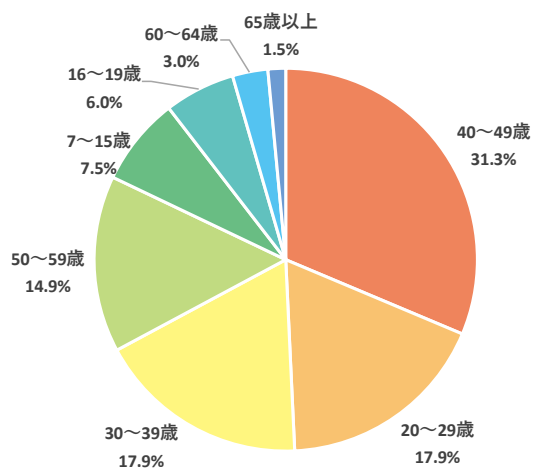
NO	項目	回答数	割合
1	ひきこもり状態にある方	32	48.5%
2	ご家族の方	25	37.9%
3	ご親族	3	4.5%
4	区民	2	3.0%
5	近隣の方	2	3.0%
6	その他	2	3.0%
合計		66	100.0%



(2) 年齢

・「50～59歳」、「40～49歳」、「30～39歳」をあわせると全体の約6割となり、若年層より中年層の回答が目立った。

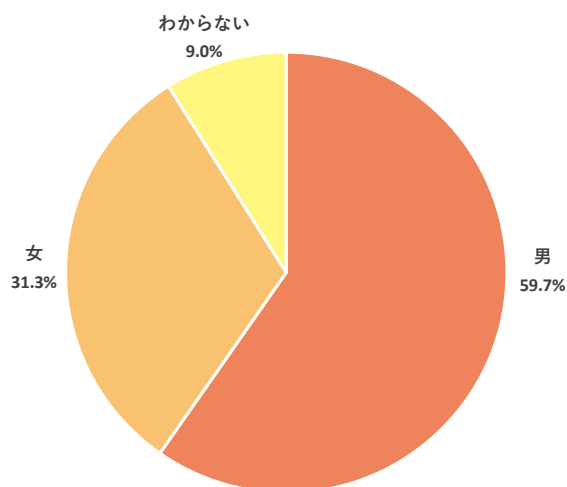
NO	項目	回答数	割合
1	40～49歳	21	31.3%
2	20～29歳	12	17.9%
3	30～39歳	12	17.9%
4	50～59歳	10	14.9%
5	7～15歳	5	7.5%
6	16～19歳	4	6.0%
7	60～64歳	2	3.0%
8	65歳以上	1	1.5%
合計		67	100.0%



(3) 性別

- ・男性が女性に比べ倍近い人数となっている。

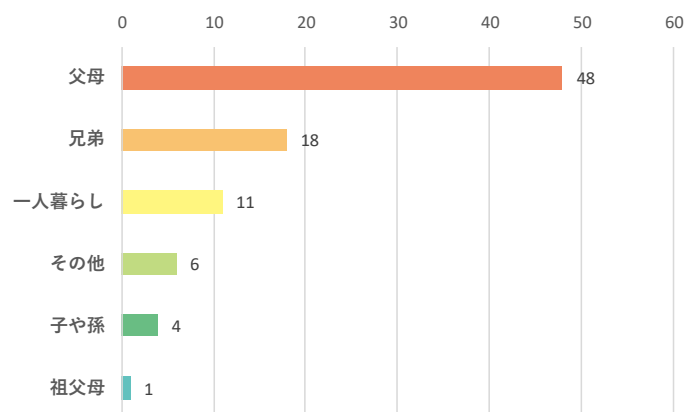
NO	項目	回答数	割合
1	男	40	59.7%
2	女	21	31.3%
3	わからない	6	9.0%
合計		67	100.0%



(4) 家族と同居しているか（複数回答可）

- ・「父母」との同居が半数以上を占める結果となった。
- ・「一人暮らし」は全体の約 2 割の 11 名となった。

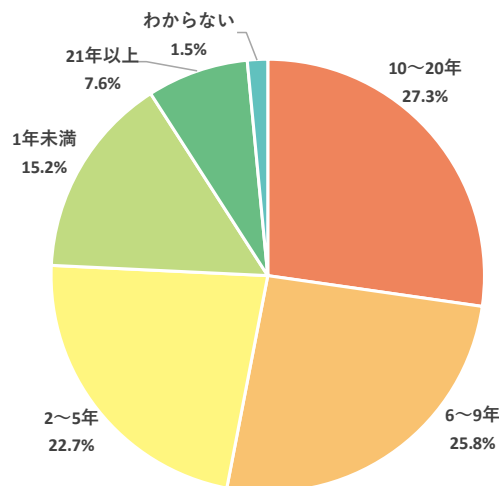
NO	項目	回答数	割合
1	父母	48	72.7%
2	兄弟	18	27.3%
3	一人暮らし	11	16.7%
4	その他	6	9.1%
5	子や孫	4	6.1%
6	祖父母	1	1.5%
回答者数		66	



(5) ひきこもり状態になってからの期間

・「10～20年」が約3割の18名、「21年以上」が約1割の5名と、ひきこもり状態が長期化している世帯が一定数いるとの回答であった。

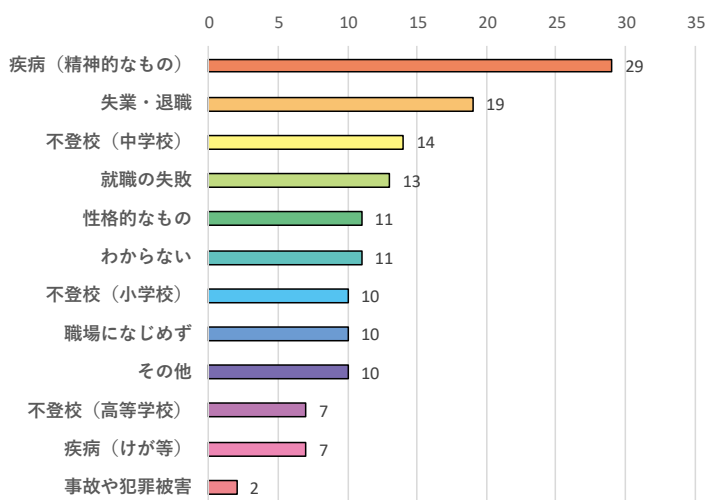
NO	項目	回答数	割合
1	10～20年	18	27.3%
2	6～9年	17	25.8%
3	2～5年	15	22.7%
4	1年未満	10	15.2%
5	21年以上	5	7.6%
6	わからない	1	1.5%
合計		66	100.0%



(6) ひきこもり状態になったきっかけ（複数回答可）

・幅広く回答が見られたが、単体では「疾病（精神的なもの）」が29名と最も多い。

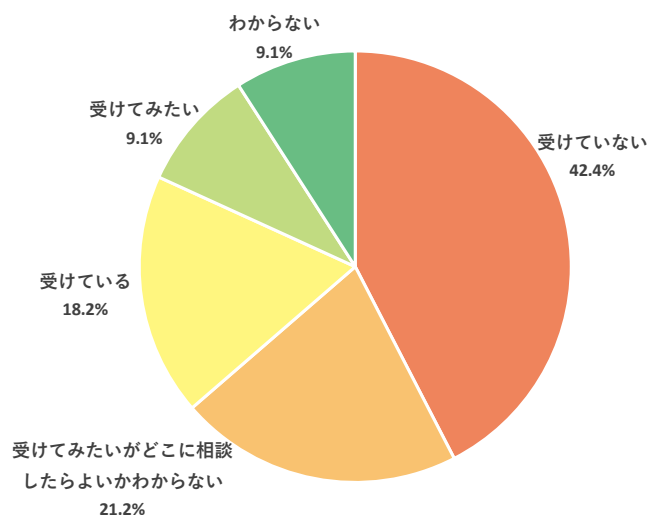
NO	項目	回答数	割合
1	疾病（精神的なもの）	29	43.9%
2	失業・退職	19	28.8%
3	不登校（中学校）	14	21.2%
4	就職の失敗	13	19.7%
5	性格的なもの	11	16.7%
6	わからない	11	16.7%
7	不登校（小学校）	10	15.2%
8	職場になじめず	10	15.2%
9	その他	10	15.2%
10	不登校（高等学校）	7	10.6%
11	疾病（けが等）	7	10.6%
12	事故や犯罪被害	2	3.0%
回答者数		66	



(7) 現在相談（支援）を受けているか

- ・「受けている」と回答した人が約2割いる一方で、「受けていない」との回答が約4割であった。
- ・さらに、「受けてみたい」「受けてみたいがどこに相談したらよいかわからない」が全体の約三分の一を占めている。

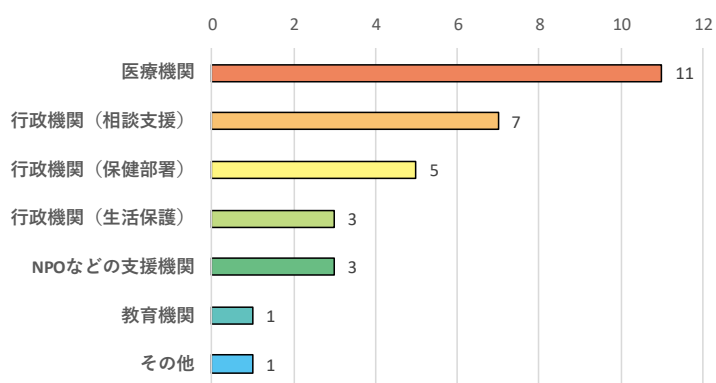
NO	項目	回答数	割合
1	受けていない	28	42.4%
2	受けてみたいがどこに相談したらよいかわからない	14	21.2%
3	受けている	12	18.2%
4	受けてみたい	6	9.1%
5	わからない	6	9.1%
合計		66	100.0%



(8) どのようなところで相談（支援）を受けているか（複数回答可）

- ・「医療機関」が最も多く約6割となっており、次いで行政機関（相談支援）が約4割となっている。

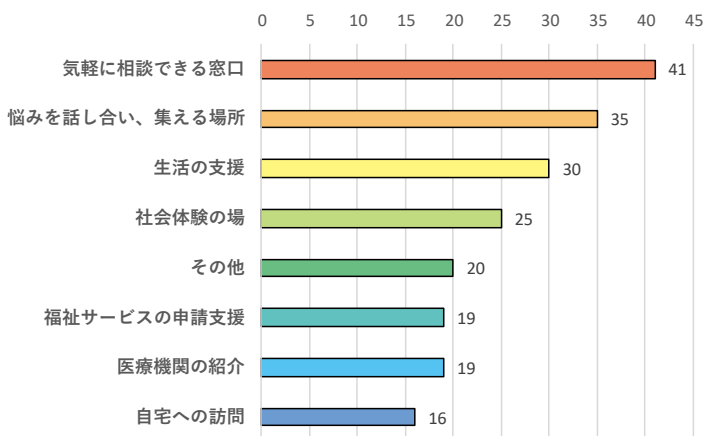
NO	項目	回答数	割合
1	医療機関	11	61.1%
2	行政機関（相談支援）	7	38.9%
3	行政機関（保健部署）	5	27.8%
4	行政機関（生活保護）	3	16.7%
5	NPOなどの支援機関	3	16.7%
6	教育機関	1	5.6%
7	その他	1	5.6%
回答者数		18	



(9) どのような支援が必要と考えるか（複数回答可）

- どの回答項目に対しても一定数の回答があったが、その中で最も多かったのは「気軽に相談できる窓口」の約6割となった。
- 次いで「悩みを話し合い、集える場所」が約5割と、居場所を求める声も多く寄せられた。

NO	項目	回答数	割合
1	気軽に相談できる窓口	41	63.1%
2	悩みを話し合い、集える場所	35	53.8%
3	生活の支援	30	46.2%
4	社会体験の場	25	38.5%
5	その他	20	30.8%
6	福祉サービスの申請支援	19	29.2%
7	医療機関の紹介	19	29.2%
8	自宅への訪問	16	24.6%
回答者数		65	



2 自由意見

当事者とその家族等から寄せられた意見の中から、代表的なものを抜粋し、以下のとおり分類したうえで紹介する。

(1) ひきこもり当事者からの意見（43名から寄せられた意見）

■ 相談先の不安

- 社会に出るためには少しずつ人と話せたらいいとおもっています。気軽に集まって話ができるような場所が欲しい。（6件）
- ひきこもりかも、と言う時に専門家のアドバイスがほしかった。もし、あの時に、今知り得ていることが分かっていたなら、これほど長期化しなかったかもしれない。
- いろいろ相談した時期が有りましたが、今は本人現状維持して死ぬのを待っている様子。私も諦め、自分は人生を楽しんで生きようと決めました。
- なんでもいいから話しを聞いてくれる人がいてほしいです。こんな状態になっているのが自分だけではないことを親に知ってほしいです。
- 夏休み明けから学校に行けなくなって1ヶ月以上経ちました。どのくらいで相談していいかも悩みながら、そのうち良くなる期待もしながらきましたが、やっぱり難しい。
- 人間関係が原因で鬱になり通院中です。外に出ることが怖くなり、買い物に行くのも困っています。何とかしたいのですが、怖くてどうしていいかわかりません。
- 年齢制限のない相談しやすい場所や就労支援のなどがあるとありがたいです。
- やる気がなく、相談すると叩かれる、嫌味を言われる、小言を言われる気がして、体が動かない。自分でもできることをしなきゃ行けないと毎日自分を責め続けているが、誰にも聞けず、借金が増え、身の回りのことをすることで精一杯になる。日に日に判断力が落ち、ただ「生きている」だけができることになってしまう。そういう状態から抜け出せないのも、何も思いつかない。
- どこに相談したらいいのかわからない。気軽に相談できる窓口がほしい。うちの場合は人混みが苦手なようなのでカウンセリングも受けていたのですが今はしていません。大学に入学して秋位から行かなくなり休学ののち退学。通信教育を受けているのですがほとんど出かけてないです。
- ひきこもり相談の専門窓口を作って欲しい。
- どこに相談したらよいかかわからない。親がいなくなった時の生活が心配。本人が相談にいける場所、また家族が相談にいける場所が欲しい。

■ 社会復帰への不安

- まずは社会へ出て自立出来る様にサポートしてもらえると助かります。（3件）
- 社会に出るチャンスがあれば。（2件）
- 雇用契約が持病で守れない。（2件）
- 真面目な性格なので、自分が必要な仕事があれば一生懸命取り組めると思います。
- 雇用されない働き方。働かされたくない。
- 様々な理由で働けない。雇用されることが出来ない。自ら働く事を考える。雇用される事だけが最終目的になっているのが問題。お金を稼いで生きる支援。

- ひきこもり支援というとすぐ就労にあてはめがちですが、支援につながるために電話をしたくても、誰とも話すことなく過ごしているので文字通りに「声が出せない」状態だったりもします。体力も衰えています。いきなり就労や一人暮らし（または施設）ではなく、個人個人にあった、ひきこもり支援の計画を私のような当事者と支援者の相互で確認しながら作り、ゆるいペースで支援いただけると嬉しいです。支援する方々には、私のようなひきこもりに対して「どうせなにもできない人なのだからこちらの言うことに従ってればいい」という態度で接するのではなく、時間と手間をかければ出来るようになる人と思って、丁寧に接して欲しいです。
- ひきこもりは挨拶もまともにできない子も普通にいますので、社会生活の上でのマナー教室もあると嬉しいです。また、ひきこもりは私のように長期化しやすいです。健康で元気で出歩ける人でも長いブランクがあると雇用されるのは高年齢も加わって難しく、さらに継続することは難しいのが現実です。
- 辛い症状が、治りません。社会に出たくても、不安と緊張が酷く、最初の一步が出来ません。お金もなく、不安ばかりが増すばかりです。家にいれば何かあった時も対処できるので、在宅で出来る仕事とか紹介して頂きたいです。
- 誰にでも出来るような簡単な仕事とかボランティアでもさせて欲しい。
- 現況、生活保護の支援を受けていますので、その面で心配はしていません。ただ、見通しが立たない。区報などを見て、きっかけを探しています。いちばんいいのは、近所を15分位からただ歩くだけでいいみたいです。その気がおこらないというか、気が進みません。ここに書かせて頂いただけで、気持ち落ち着き、考えもまとまった気がします。自然に、楽しく、ただ歩く習慣が身に付けばいいです。何か新しく始めるには費用と少し時間が必要です。ただ歩くなら、しかし恐ろしく脚が重いです。そのような点が今の自分の問題点です。
- 引き込もっていると話せる相手もいなくなり、社会的な常識やつながりなくなることを心配している。身体が弱い（喘息持ち）こともあり、家にこもって10年以上になって、年齢も上がってくるとますます就業の機会がなくなるし、その気もうせてくる。少しでも社会とつながりを持つために家でできる仕事とかないものか。金額は少なくとも内職なりなんなりでも社会とのつながりができるのではないかと考えています。
- 江戸川区にも私のようなひきこもりは沢山いると思います。なるべく正確なひきこもりの数を把握して、支援をしていただきたいと思います。絶望ではなく危機感をもち、不安ではなく勇気をもてるような、何度でも何歳からでもやりなおせる社会の実現を是非とも江戸川区で実践できるように、どうかひとりひとりに併走するような支援をして欲しいと願っています。
- このままではいけないと思いつつ、なかなか最初の一步を踏み出すことができない。
- 仕事をして自立をするのはまだ自信がありません。
- 実は私は22歳から28歳まで引きこもっており、お恥ずかしいことですが30歳になって初めてアルバイトを開始し、その後、正社員となりました（現在は37歳です）。ですからこのアンケートにどう答えればいいのか迷ったのですが、22歳から28歳まではまさに自分が「江戸川区で引きこもる当事者」でしたので、その当時の自分の立場でアンケートにお答えさせていただきました。私の場合は「自分と楽しそうに話してくれる人（電話などでも構いません）」と「気軽に始められるゆるいアルバイト的なもの」がおおいに役立ったと考えています。

■ 経済的な不安

- ずっと親からのお金で生活ができていたけど親が死んだらどうしていいのかわからない。これからの生活が心配。(5件)
- ひきこもり問題について行政の福祉制度から抜け落ちやすい印象がありますし、ひきこもり問題だけに特化せず失業者や障害者など全体を薄く広くカバーできる失業保険的な物が必要だと思っています。私の場合、医療機関に通院していますが、障害の確定診断が出るまでの通院費が常に心配でした。今後手帳取得や自立支援医療を受けるにも通院費や診断書にお金がかかりますし、現金の支援があれば一歩踏み出そうとする当事者も増えると思います。行政には貧困に近いひきこもり当事者に対して経済的な支援も必要だと思っています。

■ 行政への意見

- 話を聞いているふりをして全然話を聞いていない。たらい回し。こちら側から解決策を提示しても「出来ない」「自己責任」と言われた。行政が SNS にもっと参加すべきだ。
- 窓口の人が壊れたテープみたいにマニュアルに書いてある事しか喋らないのを直してほしい。たらい回しをするな。適当な事を言って追い返すな。そもそも社会から追い出されたのだから、恨みと憎しみの社会へ復帰したいなんて思わない。行政が何十年も何もしてこなかったからこうなっているのだ。

(2) 当事者の家族等からの意見(29名から寄せられた意見)

■ 相談に関する意見

- 親が悩みを話して共感できる人たちが集まる場所があったら気持ちが楽になると思います。(5件)
- 外出を億劫がる人に対して、「こちらに来てください」は無理。本当に支援してくれるなら訪問してほしい。(3件)
- 側にいる家族として、何か恥ずかしいような気持ちがあり、相談もできません。前に保健所に電話をした時に、本人も一緒に、と言われてやめました。(2件)
- ひきこもりの兄弟をかかえている。以前母親が区役所に相談に行ったが、対応が冷たく非常に傷ついたと言っていた。経済面の不安、この先どうすればよいのか？親身になって相談にのってもらえる区の専門窓口や相談員がいればよいのと思う。(2件)
- ひきこもり状態が続くと例え支援機関や行政の窓口へ出向くのも物凄くハードルが高くなりますし、市報などにさり気なく支援相談の案内について記載があると当事者や家族も出向きやすくなると思います。
- ひきこもり家族の中には親子関係が悪くなっている世帯もありますし、相談先について書かれている配布物をポストに入れておくだけでも全く違ってくると思います。
- 高名な先生の話など、区民に向けた講演会などにも行って、はなしを聞いてみたいです。マスコミに取り上げられているうちに、この問題を廃れさすことのないように、対策を立ててほしいです。
- 手が出せない。相談しても無駄。たらい回し、または、生活の援助もないと期待しておらず、身内も軽くあしらわれるし、友達もいなくて苦労だけが残り、何に手を出しても空回りして、生活を立て直せなかった。

■ 支援方法に関して

- 親として何をどうしたら良いのか、わからない。(2件)
- 外に連れ出すきっかけ。
- 本人を強制的にひきこもり環境から引き剥がすことのできる支援。
- 支援をするから引きこもる。
- 友人が1月に仕事を辞めてから引きこもっているようで、今どのような状態にいるのか気になります。
- 本人に社会に出ないといけないという自覚が無いので難しい。
- ひきこもりになる要素はその家庭に何かしらの問題があるのではないかと指摘します。そこを見抜くという力が今の行政に必要ではないのかと思います。
- 近所に、たまに見かける方がいます。家族と一緒に住んでいて、日中たまに外に出てすぐに戻ってきていて、夜は怒鳴ったりもしているので、たぶんひきこもりなのでは、と思います。両親は高齢のようですが、あいさつもするし、温厚そうな方です。この両親がいなかったらこの人はどうになってしまうのでしょうか。今は生活ができていますが、このあとのことが心配です。
- 家族で今後どうするのかの話し合いをしても、他人事のようで、会話が成り立ちません。どうしたら社会に出られるようになるのか、規則正しい生活を送ることができるのか、家族だけでは話し合いをしても限界があります。
- 本人も今の状態から抜け出せず、死ぬのを待つだけだと悲観的になっています。一度、仕事を手伝った時に、いろいろ試行錯誤している姿をみて、機会があれば自信を取り戻し、生きる糧になるのではと思いました。
- すぐに独り立ちは無理だとしても、今のうちに何か考えなければならぬと思っています。
- 父は関心がありません。私は家を出てしまったので、このままでは母親が可愛そうです。母親を手助けしてくれる制度がほしいです。
- 無収入で鬱の旦那を10年以上面倒見てきて疲れている。一週間くらい引き取ってもらえる場所はないだろうか。通常の職務はできないだろうから、社会復帰させられる場が知りたい。
- ひきこもりは親も国も1回見放した方が良くと思う。
- いじめが原因だと思っています。何も話してくれません。娘の心を開いてくれるような方法知りたいです。
- このままだと将来が心配でなりません。親も知識が必要です。学習の機会があれば参加したいです。行政はひきこもりの支援に力をいれてください。毎日が不安でこのままだと共倒れになりそうです。

■ 家族等の負担に関して

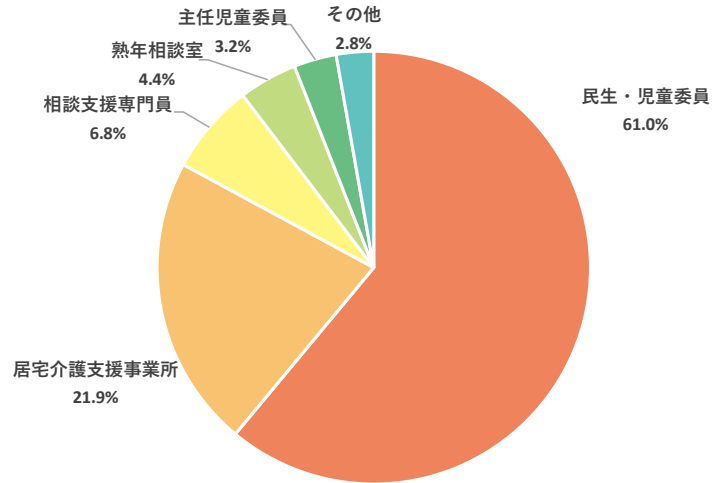
- もう、いい年齢となってしまいましたが、家から出ない息子については、半ば諦めています。
- 両親も高齢なので今後ひとりになった時の生活に不安があり、考えると夜も眠れなくなります。何十年と話をしてきましたが本人が何もせず、困った時だけ私に頼ってくる事にも怒りのような気持ちがあるのが正直な気持ちです。
- 家族だけでは解決できません。
- 高齢の親だけでなく、兄弟姉妹も苦悩している現状をわかっていただきたく思います。
- 兄が20年以上ひきこもっています。母親が何か言うと、以前は暴力を振るっていました。
- 母親に毒親と八つ当たり(暴言数時間、軽めの暴力等)。私は独身で只のパートの身。先が見えない。

第2節 関係機関調査

1 回答者について

(1) 回答者の職位

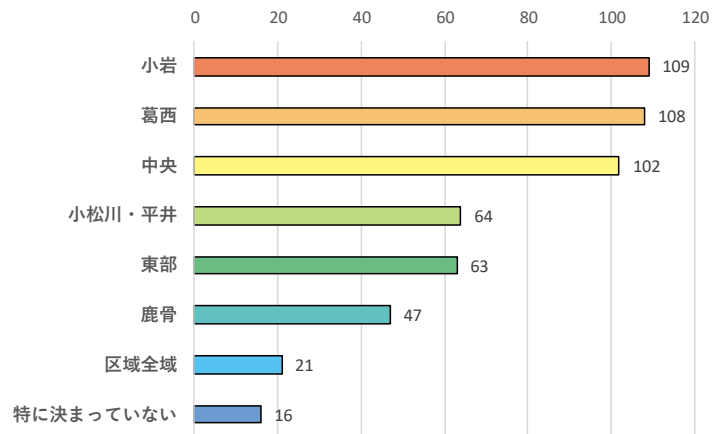
NO	項目	回答数	割合
1	民生・児童委員	307	61.0%
2	居宅介護支援事業所	110	21.9%
3	相談支援専門員	34	6.8%
4	熟年相談室	22	4.4%
5	主任児童委員	16	3.2%
6	その他	14	2.8%
合計		503	100.0%



(2) 担当している地域（複数回答可）

・小岩地区が最も多く、続いて葛西地区であった。

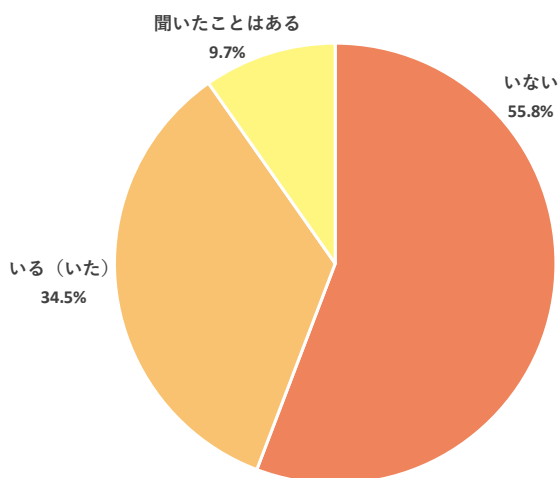
NO	項目	回答数	割合
1	小岩	109	22.0%
2	葛西	108	21.8%
3	中央	102	20.6%
4	小松川・平井	64	12.9%
5	東部	63	12.7%
6	鹿骨	47	9.5%
7	区域全域	21	4.2%
8	特に決まっていない	16	3.2%
回答者数		496	



(3) 自身の周辺におけるひきこもり状態にある人の有無

・自分の周辺に「ひきこもり状態にある人」はいないと回答した人が半数以上を占めていた。

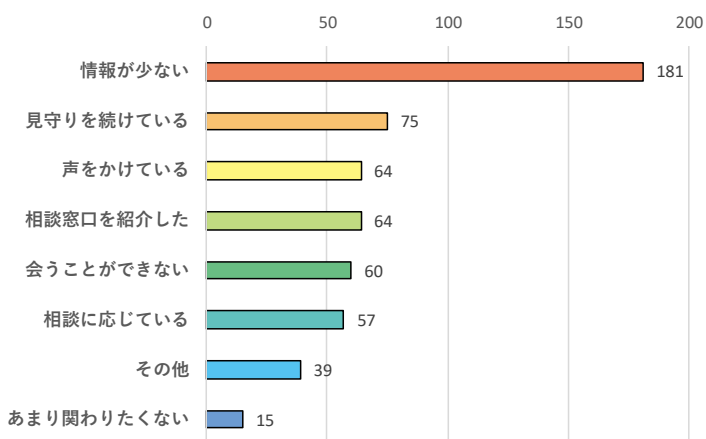
NO	項目	回答数	割合
1	いない	275	55.8%
2	いる(いた)	170	34.5%
3	聞いたことはある	48	9.7%
合計		493	100.0%



(4) ひきこもり状態にある人への関りについて(複数回答可)

・「ひきこもり状態にある方に関する情報が少ない」と回答した関係機関が半数を上回っていた。

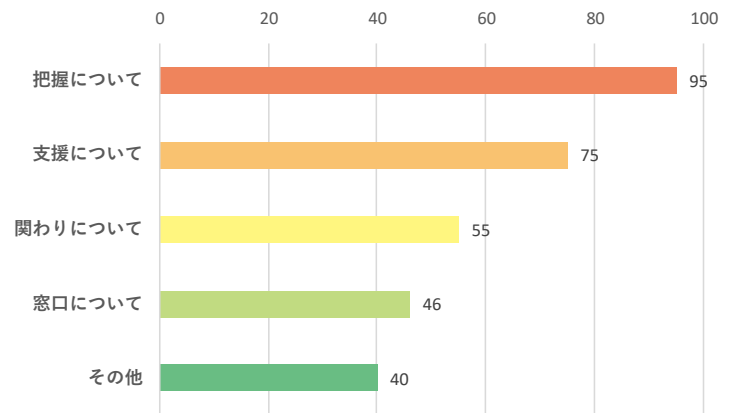
NO	項目	回答数	割合
1	ひきこもり状態にある方に関する情報が少ない	181	54.4%
2	ひきこもり状態であることを公言されていないので、見守りを続けている	75	22.5%
3	日頃からひきこもり状態にある方やご家族に声をかけている	64	19.2%
4	相談窓口を紹介したことがある	64	19.2%
5	いることは分かっているが、会うことができない	60	18.0%
6	日頃からひきこもり状態にある方やご家族の相談に応じている	57	17.1%
7	その他	39	11.7%
8	あまり関わりたくない	15	4.5%
回答者数		333	



(5) 行政のひきこもり問題への取り組みについて（複数回答可）

- 行政の「ひきこもり問題」の把握について意見、質問を寄せた関係機関が最も多かった。

NO	項目	回答数	割合
1	把握について	95	38.8%
2	支援について	75	30.6%
3	関わりについて	55	22.4%
4	窓口について	46	18.8%
5	その他	40	16.3%
回答者数		245	



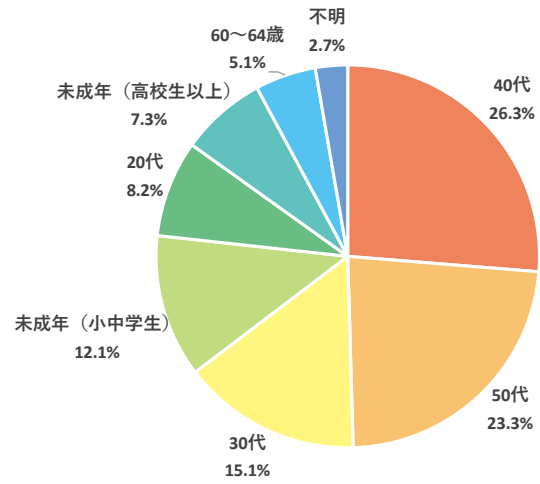
2 「ひきこもり状態にある人」について

※1－(3)で「ひきこもり状態にある人」が「いる(いた)」と回答した人を対象に質問。

(1) 年齢

・関係機関が把握している当事者の年齢は40代が最も多く、続いて50代であった。

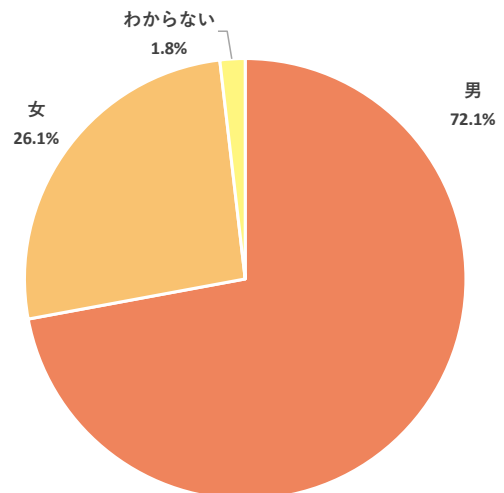
NO	項目	回答数	割合
1	40代	87	26.3%
2	50代	77	23.3%
3	30代	50	15.1%
4	未成年(小中学生)	40	12.1%
5	20代	27	8.2%
6	未成年(高校生以上)	24	7.3%
7	60～64歳	17	5.1%
8	不明	9	2.7%
合計		331	100.0%



(2) 性別

・関係機関が把握する当事者の7割以上が男性であった。

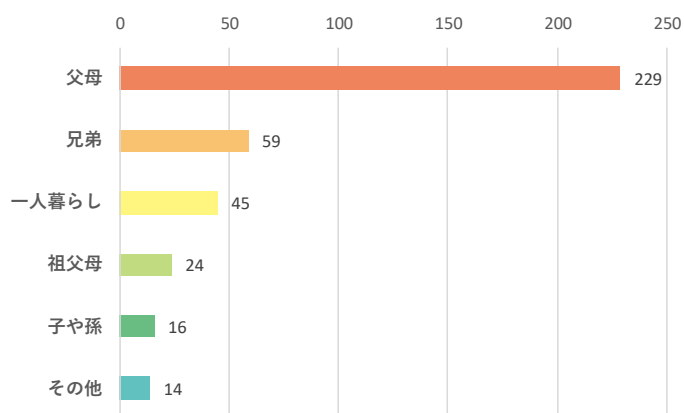
NO	項目	回答数	割合
1	男	235	72.1%
2	女	85	26.1%
3	わからない	6	1.8%
合計		326	100.0%



(3) 同居の家族（複数回答可）

- ・関係機関の把握している当事者の7割以上が「父母」と同居していた。

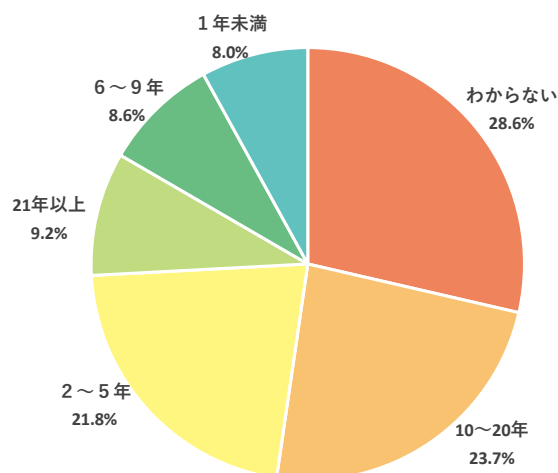
NO	項目	回答数	割合
1	父母	229	71.3%
2	兄弟	59	18.4%
3	一人暮らし	45	14.0%
4	祖父母	24	7.5%
5	子や孫	16	5.0%
6	その他	14	4.4%
回答者数		321	



(4) ひきこもり状態の期間

- ・ひきこもり状態の期間は「わからない」と回答した関係機関が最も多かった。
- ・関係機関が期間を把握している当事者の中では、「10年～20年」及び「2年～5年」が高い割合を占めていた。

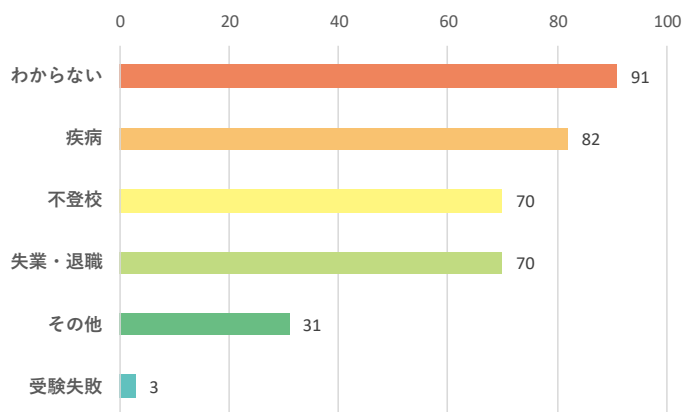
NO	項目	回答数	割合
1	わからない	93	28.6%
2	10～20年	77	23.7%
3	2～5年	71	21.8%
4	21年以上	30	9.2%
5	6～9年	28	8.6%
6	1年未満	26	8.0%
合計		325	100.0%



(5) ひきこもり状態になったきっかけ（複数回答可）

- きっかけは「わからない」と回答した関係機関が最も多かった。
- きっかけが分かる人の中では、「疾病」が最も多く、続いて「不登校」と「失業・退職」が同数であった。

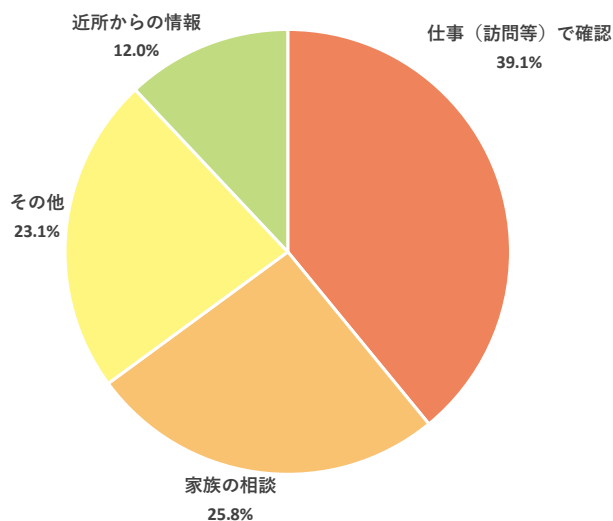
NO	項目	回答数	割合
1	わからない	91	28.0%
2	疾病	82	25.2%
3	不登校	70	21.5%
4	失業・退職	70	21.5%
5	その他	31	9.5%
6	受験失敗	3	0.9%
回答者数		325	



(6) ひきこもり状態にある人をどこで知ったか

- 約4割の関係機関が「仕事（訪問等）」で確認したと回答していた。

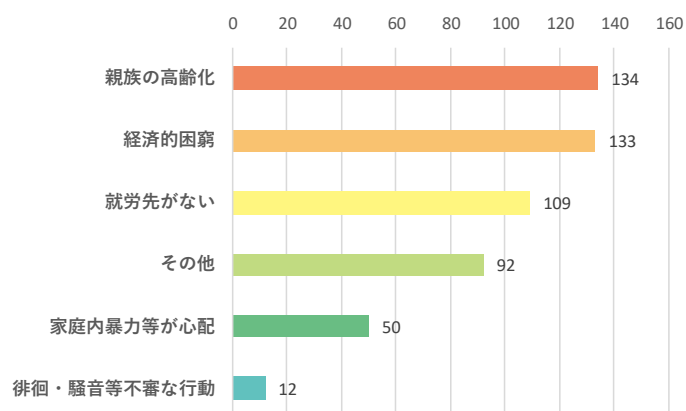
NO	項目	回答数	割合
1	仕事（訪問等）で確認	127	39.1%
2	家族の相談	84	25.8%
3	その他	75	23.1%
4	近所からの情報	39	12.0%
合計		325	100.0%



(7) 問題点を挙げるとしたら（複数回答可）

- ・関係機関の4割以上が当事者の問題点として、「親族の高齢化」と経済的困窮をあげていた。

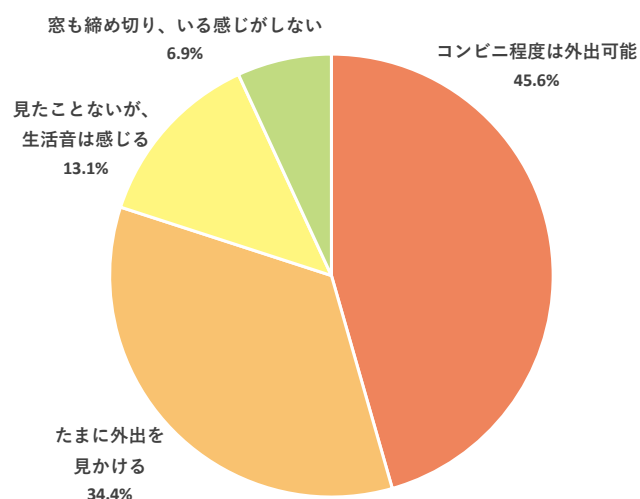
NO	項目	回答数	割合
1	親族の高齢化	134	42.7%
2	経済的困窮	133	42.4%
3	就労先がない	109	34.7%
4	その他	92	29.3%
5	家庭内暴力等が心配	50	15.9%
6	徘徊・騒音等不審な行動	12	3.8%
回答者数		314	



(8) ひきこもり状態の度合い

- ・「コンビニ程度は外出可能」「たまに外出を見かける」が約8割を占めていた。
- ・その一方で約2割の関係機関は、当事者について、「見たことないが生活音は感じる」若しくは「窓も締め切り、いる感じがしない」状態と回答していた。

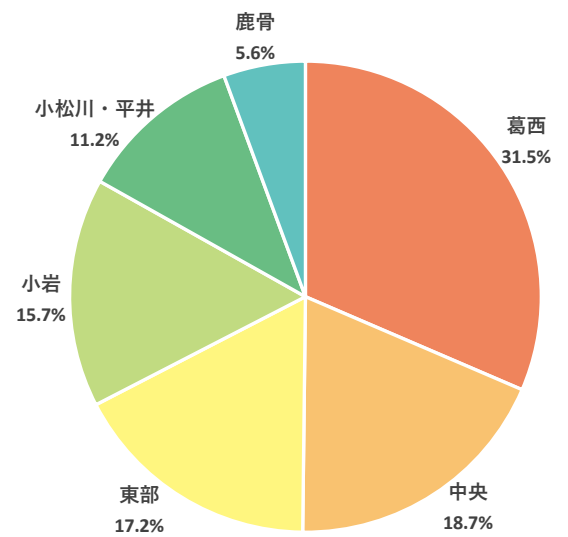
NO	項目	回答数	割合
1	コンビニ程度は外出可能	139	45.6%
2	たまに外出を見かける	105	34.4%
3	見たことないが、生活音は感じる	40	13.1%
4	窓も締め切り、いる感じがしない	21	6.9%
合計		305	100.0%



(9) 住まいの場所

- ・関係機関の把握している当事者の住まいは葛西地区が最も多く、続いて中央地区であった。

NO	項目	回答数	割合
1	葛西	84	31.5%
2	中央	50	18.7%
3	東部	46	17.2%
4	小岩	42	15.7%
5	小松川・平井	30	11.2%
6	鹿骨	15	5.6%
合計		267	100.0%



3 自由意見

関係機関から寄せられた意見の中から、代表的なものを抜粋し、以下のとおり分類して紹介する。

■ 窓口・相談に関して

- どの段階でどこに相談したらよいか。相談窓口について知りたい。(約 25 件)
- 江戸川区内でもいろいろな窓口があって、わかりにくくなっているようにも思います。一本化された窓口情報がほしいです。(約 10 件)
- 「相談意志がないと対応できない」という事になると、ひきこもりのご本人は意志がない方が少ないと思うのでアウトリーチを含め柔軟に対応できればと思う。(約 10 件)
- ケアマネジャーとしての相談や連携の窓口があるのであれば教えてほしい。(約 5 件)
- 母親として、どう接してよいのか、これでよいのかわからない。親としての対応の仕方を相談したりできる所があるとよいと。同じような子をもつ親同士が話せる場があったらうれしいとのこと。
- 小学生ぐらいの年代の子が行ける所を増やしてほしい。
- 相談先を増やしてほしい。
- 窓口へ相談したことはありますが、具体的な方策はありませんでした。結局は、こちらでご家族への相談対応を継続し、アドバイスを行っている状態になります。もう少し次のステップへつながるようなお話ができれば助かります。
- 相談先で就労支援も含めたサポートが得られると良いです。相談は本人にとっては第一歩ではありませんが、その先の支援がないことになるとまた「ひきこもり」になる危険があると思います。

■ 支援・関わり方に関して

- ひきこもり者の発見方法や対応窓口、支援方法等をひとくくりにまとめた冊子(ひきこもりの発見から支援、自立、脱出までをざっくりまとめたようなもの)や講習会、講演会があると良いと思う。現状では該当者が居たとしてもどの様に関わったら良いかわからない。(約 35 件)
- 区の役所の方々や精神的分野の勉強や学んだ方に対応していただきたいのが本音です。(約 20 件)
- 学校、関係機関、民生委員の皆で関わっておりますが、あまり良い結果が出てこない。どうしたらよいか悩んでおります。(約 10 件)
- すぐの解決はできなくても、連携できる体制が整えばいいと思う。(約 10 件)
- ひきこもりという言葉でひとくくりに考えると対応が複雑になるので、パターン化してそれぞれに対策を考えたほうが良いと思います。(約 5 件)
- 人間関係だけではなく、病気やケガでもひきこもってしまう場合もあると思うので、その方の気持ちに寄りそえる環境も大事だと思います。(約 5 件)
- 継続的な支援や関わりをくれる人がいない。(約 5 件)
- 生活体験が不足している方、コミュニケーションをとるのが苦手な方に対して、適性のある仕事を紹介したり、ボランティア活動などをする機会があれば良いと思う。(約 5 件)
- ひきこもり支援の基幹機能を持つ事業が明確になっていないので、どの相談員がどのような支援をしてくれるのかフローチャートやマニュアルになっていると支援につながりやすい。(約 2 件)
- 長期のひきこもりをしていると自立が難しい。早期発見・早期対応が重要であることを痛感している。10代 20代の若い方への関わりや支援がより重要であると思っている。その際関わりを持てる機関の情報がほしい。(約 2 件)

- 福祉サービス自立生活援助による週一回程度の訪問による支援を行っている。(約2件)
- 2人位での訪問が望ましいのではと思います。手紙を入れたり、色んな形で心をほぐしていく必要があると思います。
- 長期化する前にどんな支援が良いのかが重要かと思います。
- ひきこもりを見つけることは、相談・通報によるところですが、周囲が積極的に動くことは少ないと思われる。できればかかわりたくないと思う人は多いと思います。それは自分事ではなく他人事だからです。
- 担当保健師と共に毎月一回訪問実施。
- ひきこもりの方へ、特化した支援力や支援に対する報酬等考えていく必要があると感じます。
- 心理職、医療職からの支援が増えてほしい。
- 今後はくらしごと相談室が積極的にご支援していただけると安心だと思いました。
- 支援相談員がいて、しっかり連携が図られている。
- 一人では不安な外出に同行したり、手続き(期限のあるもの)を代行している。子どもの進学時に必要な備品購入などを手伝った。子どもの通院に同行した。
- ひきこもっている方に対して「ひきこもりですよ?」とは当然声をかけられるはずもなく、あたり障りのない会話をする程度。次のステップにどう進めばいいのかよくわからない。
- いくつか支援やサポートの情報はあがるが、実際に活用できた経験はありません。あまり具体的な手立て、対策になっていないように感じています。
- 大体の相談の場合、はじめにご家族が相談に訪れます。しかし、結局は本人に会うまではご家族へアドバイスする形で支援や見守りを継続することになります。うまくいけばご本人に会うことができますが、障害や病気の様子が見えれば社会復帰への道のりは厳しいものになります。障害や病気が疑われれば、それを手立てに社会復帰への計画を検討しています。

■ 当事者や家族等に関して

- 地域の中でひきこもり状態にある方を見つけ出して相談に応じるというのはかなり困難なことだと思う。本人やご家族の方から相談を持ち掛けられれば別だが、本人は相談に来る可能性はかなり低いし、ご家族もなかなか他人には話づらい事柄だと思う。(約30件)
- 当人たちは困っているように感じられなかった。(約15件)
- 学校の先生と連絡はとっていて、相談しているとのことで、本人やご家族の負担にならない程度でお声掛けしたり、通学状況などを訪問して伺ったりしています。(約5件)
- 訪問したが会えなかった。(約5件)
- ひきこもり本人もたいへんですが、御家族の支援も大切だと思っています。(約5件)
- 無理強いすることなく信頼関係を構築し本人の人生観を把握しひきこもり対策をする。(約3件)
- まだ親が元気なうちは良いと思うが、1人になったら生活に困ると思われます。(約2件)
- ひきこもりと言われている人と面談すると、精神状態に異常を感じている人は少なく、特段の対応を要すると思われる人は、現在は把握できない。
- ご本人が現状維持を希望されている場合、見守ることくらいしかできないか。支援者が限定されてしまうことが不安。

- 事件があった時「そのような方がその家にいる事すら知らなかった」と近所の方が答えていたのを見て、自分の周りにもいるのかもしれないが、まったく把握されていないのではないかと思います。8050の状態になる前に当事者からの声上げをできるよう、どのようにしたらいいかを考えたいと思います。
- 多くの保護者の方は、学校ではと思われる所もあるかとかと思いますが何気ない家庭での会話の中で不満を繰り返す言う家庭の特徴もあるかと思っています。学校・家庭で脱落すると復活できない根本的な原因は、家庭にも責任がある事が多いのではないのでしょうか。〇〇しなさいと命令したり家庭の不満を繰り返す言う特徴があったり放任主義的な事が原因になってはいないのでしょうか。今の子ども達は、非常に敏感なのでひきこもりの引き金になりやすいと思います。原因は、家庭か友人関係、学校かなどしっかり親が把握して第三者と一緒に支援する事で少しずつ解決に向かうのではないかと思います。
- ひきこもりと不登校状態にある人がHSP (highly sensitiv person) 傾向である場合が多く感じます。医療職として、「疾病」をみる視点とその対象を全人的にみる視点の重要性を強く感じます。
- 「知っている」から「相談する」に至るにはひきこもりを「課題」と認識することが必要と感じます。実数等がわかればそれをどのように伝え、住民の課題感を引き出すか、考えたいと思います。

■ 当事者の把握や情報に関して

- 当事者の御家族や行政から連絡がない為、個人情報もあり、分からず、訪問できない。把握は難しい。なかなか把握しにくい事なので実際はどのような把握の仕方をしているのかをお聞きしたい。(約 50 件)
- 周辺にひきこもり状態の方がいない。(約 25 件)
- ひきこもり状態にある方を知る地域との関わりが少ない為、様子がよくわかりません。その状態にあるという情報が少しでもあれば、支援する事が出来ると思います。(約 20 件)
- 買い物に行く事がたまにあり、周りの方が見かけた、声かけたなどの情報はありました。(約 10 件)
- 聞いたことはありますが、その後どうなっているのか全然わかりません。(約 10 件)
- 小中学校に在学中は把握しやすいと思いますが、義務教育以降成人してからは難しいと思います。家族も公言しないと思いますが、どのように把握していけばよいのでしょうか。(約 5 件)
- 町会、民生委員、行政、なごみの家で情報集約会の様な場を設ける必要性を感じる。

■ 行政への意見

- 行政での取り組みではどこまで支援しているのか私達には把握できていない。(約 10 件)
- これまでは相談窓口が健康サポートセンターと理解してご案内していましたが、うまくつながらないケースも多かったように感じています。(約 10 件)
- 以前調査等であるお宅を訪問し、書類を作成し窓口にお渡しさせて頂いたが、その後にに関して質問をしたところ、個人情報はお教え出来ないとのコト。あまり関わりを持ってくれるなどの意見なのかと思ひ残念に感じたことがあった。(全 2 件)
- 学校の対応に不信を持っていたので、一緒に考え、行動した。(全 2 件)
- 不登校児童に関して、学校の先生方は一生懸命に対応していると思います。
- 子ども家庭支援センターにつなぐことはありますが、生活援護課でどういう支援を行われているのか知りたいです。

- 行政（区）だけではとても大変だと思うので、委託先など協力先を決めて対応するなど、新しい取り組みが絶対的に必要。
- 行政としてこの問題について一歩踏み込んだ施策を打ち出したことは素晴らしいと思います。
- 戸籍を見ることが出来る訳でもなく、ご家族の話から家族状況をつかむしかありません。もし、ケアマネにひきこもりの方の支援やアプローチを望むのであれば、行政から大々的に支援することになった等をお知らせください。当事者や家族そっちのけで、どうにかしましょうは避けるようお願いいたします。
- 江戸川区内にひきこもりと言われている方がどの程度いるのか知りたい。
- 対応する職員側のスキルアップも検討すべき。

■ 広報に関して

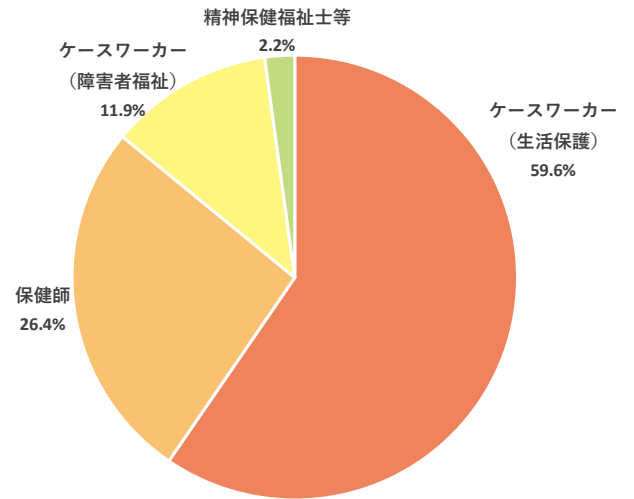
- 私の勉強不足もあり、初めてこうした「ひきこもり支援組織」が存在することを知りました。もっと広くこうした窓口、組織があることを、広報や、さまざまな機会を通じて広めていただきたいと思います。（約 10 件）
- 公言はされていない方だと声をかけづらく、相談窓口を案内するとしてもこちらから「ひきこもり」とは言えないので、案内しやすいチラシなどがあると良い（約 2 件）
- ひきこもり問題についてどんな取り組みがあるのかあまり知られていないと思うので、一般の方（現在はひきこもりに関係ない方々）にも知らせていくことが大切だと思う。そうすれば、まわりの方にそういう方がいた時に支援したり、アドバイスができるのではないかと思う。

第3節 区職員調査

1 回答者について

(1) 回答者

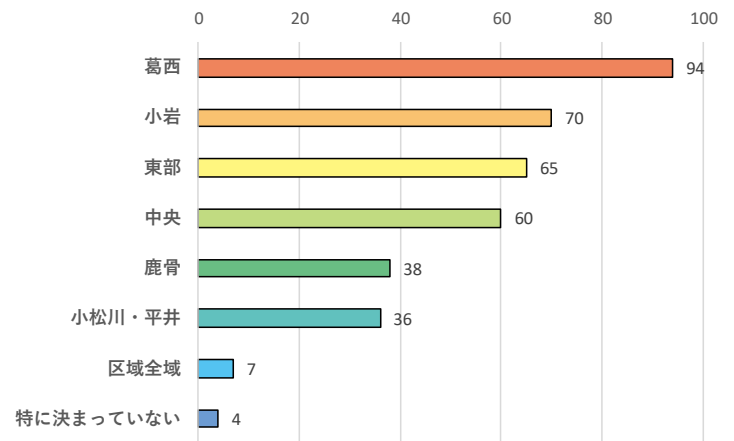
NO	項目	回答数	割合
1	ケースワーカー（生活保護）	165	59.6%
2	保健師	73	26.4%
3	ケースワーカー（障害者福祉）	33	11.9%
4	精神保健福祉士等	6	2.2%
合計		277	100.0%



(2) 担当している地域（複数回答可）

・葛西地域が一番多く全体の約3割、続いて小岩地域が約2割であった。

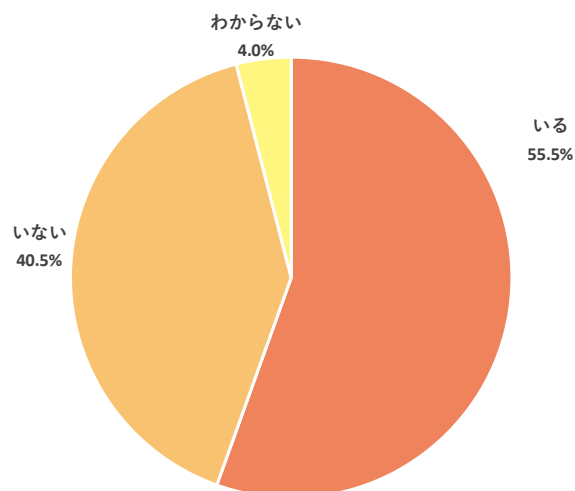
NO	項目	回答数	割合
1	葛西	94	33.9%
2	小岩	70	25.3%
3	東部	65	23.5%
4	中央	60	21.7%
5	鹿骨	38	13.7%
6	小松川・平井	36	13.0%
7	区域全域	7	2.5%
8	特に決まっていない	4	1.4%
回答者数		277	



(3) 自分の周辺にひきこもり状態にある人の有無

- ・自分の周辺に「ひきこもり状態にある人」がいると回答した人が半数以上を占めていた。

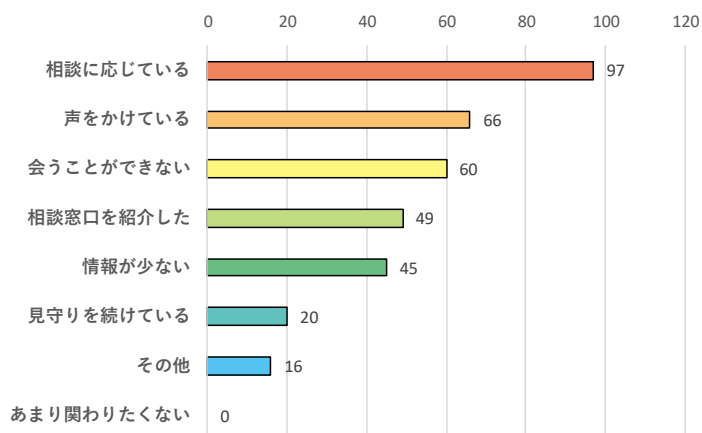
NO	項目	回答数	割合
1	いる	152	55.5%
2	いない	111	40.5%
3	わからない	11	4.0%
合計		274	100.0%



(4) ひきこもり状態にある人への関わりについて（複数回答可）

- ・「本人や家族の相談に応じている」と回答した人が約3割、「本人や家族に声をかけている」と回答した人が約2割であった。回答者の約半数が本人や家族と直接的な関わりを持っていることが分かった。

NO	項目	回答数	割合
1	日頃からひきこもり状態にある方やご家族の相談に応じている	97	35.0%
2	日頃からひきこもり状態にある方やご家族に声をかけている	66	23.8%
3	いることは分かっているが、会うことができない	60	21.7%
4	相談窓口を紹介したことがある	49	17.7%
5	ひきこもり状態にある方に関しての情報が少ない	45	16.2%
6	ひきこもり状態であることを公言されていないので、見守りを続けている	20	7.2%
7	その他	16	5.8%
8	あまり関わりたくない	0	0.0%
回答者数		277	



2 「ひきこもり状態にある人」について

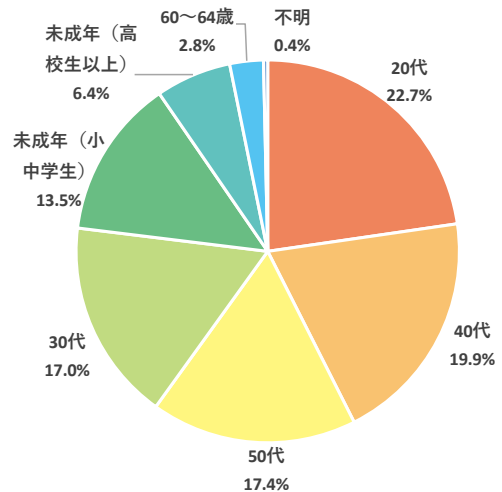
※1-(3)で「ひきこもり状態にある人」が「いる(いた)」と回答した区職員を対象に質問。

※一人で複数の当事者について回答している区職員もいる。

(1) 年齢

・ひきこもり状態にある人の約四分の一は「20代」が占めていた。

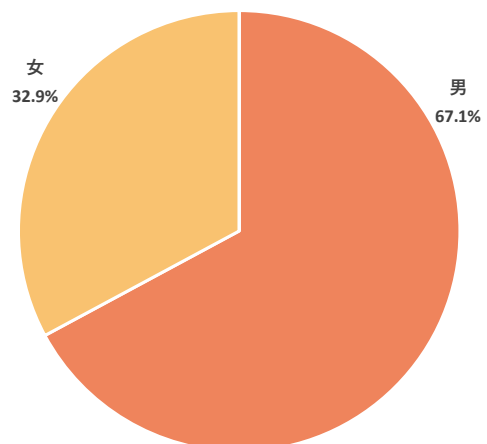
NO	項目	回答数	割合
1	20代	64	22.7%
2	40代	56	19.9%
3	50代	49	17.4%
4	30代	48	17.0%
5	未成年(小中学生)	38	13.5%
6	未成年(高校生以上)	18	6.4%
7	60~64歳	8	2.8%
8	不明	1	0.4%
合計		282	100.0%



(2) 性別

・ひきこもり状態にある人の男性は女性の倍以上となった。

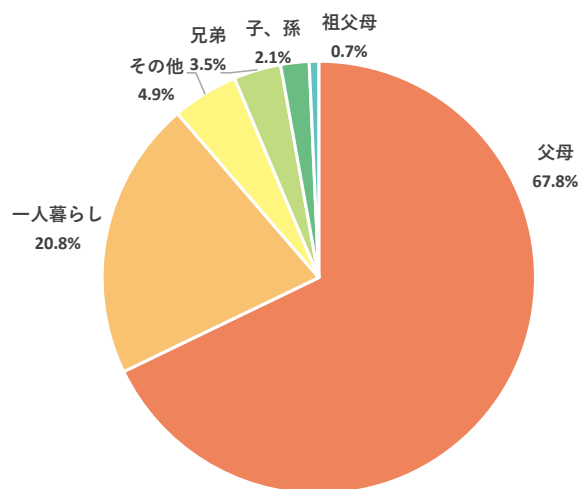
NO	項目	回答数	割合
1	男	190	67.1%
2	女	93	32.9%
3	わからない	0	0.0%
合計		283	100.0%



(3) 同居の家族

- ・約7割が「父母」との同居、約3割が「一人暮らし」であった。

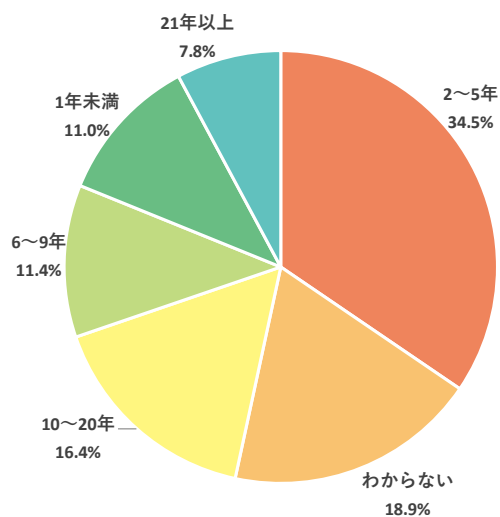
NO	項目	回答数	割合
1	父母	192	67.8%
2	一人暮らし	59	20.8%
3	その他	14	4.9%
4	兄弟	10	3.5%
5	子、孫	6	2.1%
6	祖父母	2	0.7%
合計		283	100.0%



(4) ひきこもり状態の期間

- ・ひきこもりの期間は「2年～5年」が一番多く全体の約3割であった。
- ・ひきこもりの期間が10年以上である人は全体の約四分の一を占めている。

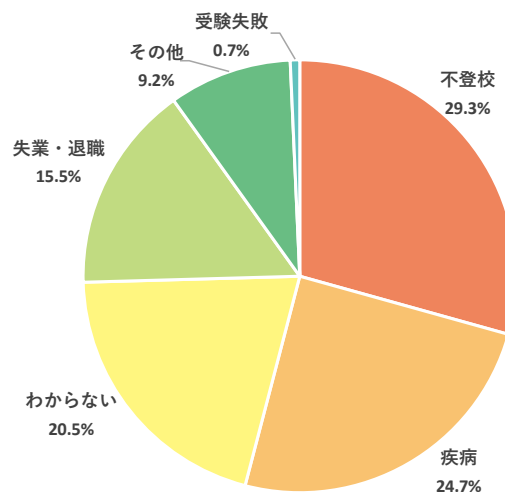
NO	項目	回答数	割合
1	2～5年	97	34.5%
2	わからない	53	18.9%
3	10～20年	46	16.4%
4	6～9年	32	11.4%
5	1年未満	31	11.0%
6	21年以上	22	7.8%
合計		281	100.0%



(5) ひきこもり状態になったきっかけ

- ひきこもりのきっかけは、「不登校」が一番多く全体の約3割を占めていた。
- 全体の約2割が「わからない」と回答しており、支援方法が不明確な人も一定数いる。

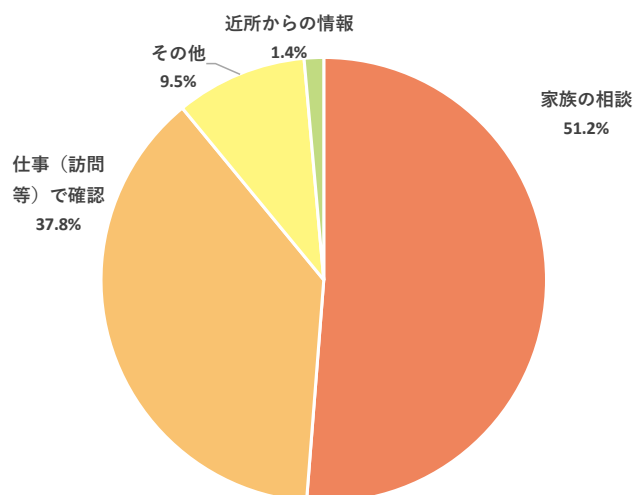
NO	項目	回答数	割合
1	不登校	83	29.3%
2	疾病	70	24.7%
3	わからない	58	20.5%
4	失業・退職	44	15.5%
5	その他	26	9.2%
6	受験失敗	2	0.7%
合計		283	100.0%



(6) ひきこもり状態にある人をどこで知ったか

- 「家族の相談」と回答した人が半数以上を占めていた。

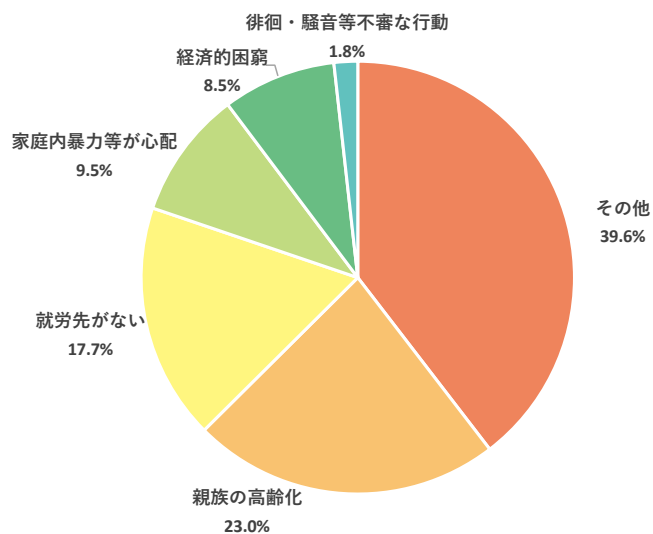
NO	項目	回答数	割合
1	家族の相談	145	51.2%
2	仕事（訪問等）で確認	107	37.8%
3	その他	27	9.5%
4	近所からの情報	4	1.4%
合計		283	100.0%



(7) 問題点を挙げるとしたら

- ・その他を除くと、「親族の高齢化」が多く、次いで就労先がないとの結果となった。

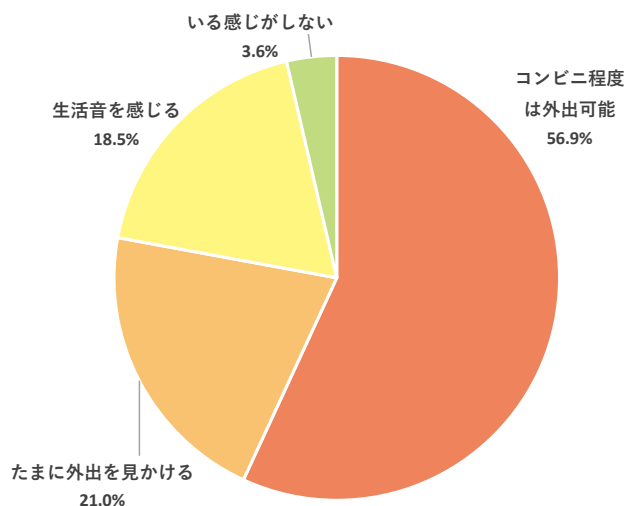
NO	項目	回答数	割合
1	その他	112	39.6%
2	親族の高齢化	65	23.0%
3	就労先がない	50	17.7%
4	家庭内暴力等が心配	27	9.5%
5	経済的困窮	24	8.5%
6	徘徊・騒音等不審な行動	5	1.8%
合計		283	100.0%



(8) ひきこもりの度合い

- ・ひきこもりの度合いは、「コンビニ程度は外出可能」が一番多く全体の約6割を占めていた。
- ・「たまに外出を見かける」と合算すると全体の約8割が外出可能な人となる。

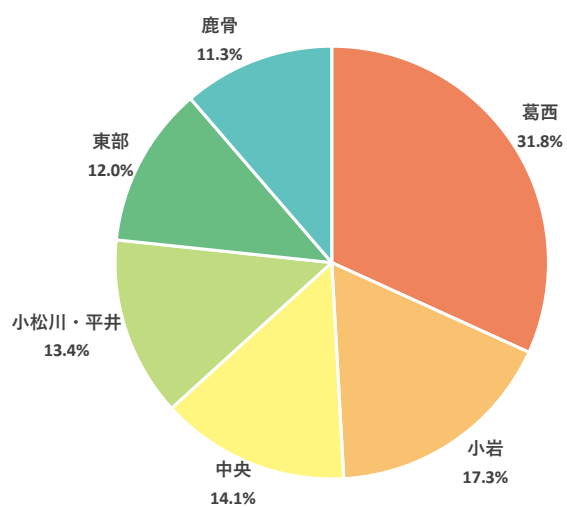
NO	項目	回答数	割合
1	コンビニ程度は外出可能	157	56.9%
2	たまに外出を見かける	58	21.0%
3	生活音を感じる	51	18.5%
4	いる感じがしない	10	3.6%
合計		276	100.0%



(9) 住まいの場所

- ・葛西地域が一番多く全体の約3割、続いて小岩地域が約2割であった。

NO	項目	回答数	割合
1	葛西	90	31.8%
2	小岩	49	17.3%
3	中央	40	14.1%
4	小松川・平井	38	13.4%
5	東部	34	12.0%
6	鹿骨	32	11.3%
合計		283	100.0%



3 自由意見

区職員から寄せられた意見の中から、代表的なものを抜粋し、下記のとおり分類したうえで紹介する。

■ 相談

- 相談者以外の家族が、本人のことについて相談する意思がない。(6件)
- 相談窓口が明確にあると迅速な対応がしやすい(5件)
- 判りやすい相談窓口があると有難い。訪問しても会ってもらえず、会っても全く話してもらえない等対応に苦慮している。(3件)
- 関わりを始めただけでどのような関係機関と連携すればいいかわからない。
- アウトリーチを利用して介入を試みたが、状況は変わらなかった。その後も電話フォローをし、訪問を申し出るも家族の希望なし。自分一人では積極的に介入出来ないため他の相談先が欲しい。
- 潜在的な引きこもり者の相談先が欲しい。
- 障害福祉サービスを住居外で受けている方は、基本的には区外のグループホームに入居し日中活動をされている方がほとんどであり、現在の部署においては直接的に関わりを持つ機会がない。
その場合住居の自治体に相談した方がいいのか、グループホーム等通所先の自治体に相談した方がいいのかわからない。
- 義務教育世代のひきこもりは発達障害や精神疾患を抱えている方もおり、周りが病状に気づけないと状況は改善されない。保護者との支援者をつなぐ相談先の存在と関係性の構築が必要と思う。
- 自地区には関係機関の協力もありひきこもりの方は現状いない。
今後問題の無い方がひきこもりになった場合ケースワーカーのみで迅速把握するのは困難。
日ごろから相談先を増やし把握できる機会を増やすのが大切かと考えられる。

■ 支援方法

- ひきこもりの改善策や当事者への対応の方法がわからない。(10件)
- 家族等周囲からの相談が多いですが、本人の問題意識がなく、なかなか動けないケースが多い。
また、支援を望んでいるように見えない場合もあるので支援が困難。(7件)
- 医師から刺激しないよう接触禁止の指示が出ている方もおり、見守りを続けている。どのように支援すれば良いか判断が難しい。(3件)
- 医療や通院に関する相談支援員へ情報共有を行い共に連絡を取るよう努めている。
一緒に訪問し、精神科の往診を打診中。ただ、支援員に頼ってしまっている部分が多い。(3件)
- 医療ケア支援員に訪問を行って頂いているが、当日キャンセルや音信不通により、ひきこもりの方に継続して会える機会が少ない状態です。(2件)
- 子ども家庭支援センターと相談しながらサポート的な役割で支援を行っている。(2件)
- 就労支援員に繋ぎ支援を行っているが当日キャンセルが多く困っている。
- 引きこもりの方と関わる中で、精神のサービスを導入して事業所の通所へつなげたケースがある。
- ひきこもり状態の20代男性を担当しています。本人に面会を了承してもらえないことや、家族が問題を隠そうとする、本人に話をしようとするとう殴られてしまうというなどで、なかなか解決の糸口がつかめない状況です。
- ケースワーカーでは1~2年で担当が変わってしまうため継続支援をするうえで関係づくりが困難に感じてしまう。

本報告書に関する留意点

- **本報告書の構成について**

本報告書では、第2章で調査結果の概要とその考察を掲載し、第3章で結果の詳細を掲載している。

- **表記について**

ひきこもり状態にある人については、「当事者」と表記している。

ひきこもり状態にある人の家族や親族については、「家族等」と表記している。

- **回答の重複について**

本調査は複数の関係機関や所属する課の異なる区職員に対して実施しているため、同じ当事者について回答している可能性がある。

- **一部未回答の調査用紙の処理について**

調査用紙に一部未回答の項目があった場合においても、回答のあった項目については有効な回答として取り扱っている。そのため、各質問項目によって回答者数が異なっている場合がある。なお、それぞれの未回答者数は記載していない。

- **図表の単位について**

報告書に掲載した図表の単位のうち、単位の記載のないものは、「件」（回答数）をあらわしている。また、回答比率（%）は小数第2位を四捨五入しているため、合計が100%にならないことがある。

- **図表における選択肢等の記載について**

図表の記載にあたっては、調査票の選択肢等の文言を一部簡略化している場合がある。

- **集計について**

第2章第2節においては、異なるグループ間での回答傾向を捉えるために、クロス集計を行い、その考察を記述している。

第3章第1節から第3節においては、回答結果の全体の傾向を捉えるため、単純集計を行い、その特徴を記述している。単純集計のグラフにおいては、傾向をよりわかりやすくするために、選択肢を回答比率（%）の大きなものから小さなものへと並び換えて表示している。

- **自由記述について**

自由記述の中から、代表的なものを抜粋し、分類したうえで紹介している。文章は原文を基本としているが、固有名詞が含まれている場合や長文の場合などは、一部省略している。複数寄せられた意見については、紹介し文末の括弧内に件数を記載している。

あとがき

ひきこもり状態にある方は現在、国内において100万人を超えているという報告があります。

国の調査結果を受けて単純に区の状況をあてはめてみますと、1万人近い方がひきこもり、またはひきこもりに近い状態にあるということになります。この数字が示すところは、今後の区の行政方針にとどまらず、国としても対策を立てねば、単なる現象ではなく国政を揺るがす問題に発展する可能性が生じてくるということです。

本区における「ひきこもり」についても、かねてより問題視はされてきました。今回、ひきこもりの状況を把握すべく、関係機関に協力をお願いして実態調査を実施しました。民生・児童委員、介護支援事業者、障害者施設、地域包括支援センター、そして区役所でひきこもりの相談を受けている部署、ケースワーカーなどの機関・個人です。また、インターネットを通じて当事者・家族の方にも声をかけて「生の声」を聴かせていただく試みも実施いたしました。

調査の取りまとめが生活保護の実施機関である「生活援護課」とさせていただいたのは、同課にて行っている生活困窮者自立支援制度に基づく支援事業・「くらしごと相談室」が設置されているからです。8050問題と言われている現況においても、多くの方にやってくるであろう「貧困」という問題がつながってくる、と考えられます。

調査の結果を見ると、関係機関が抱えている課題、当事者の皆さまが求めていることが、少しずつ浮かび上がってきました。このひきこもり問題は、一朝一夕で解決できるものであるとは考えておりません。支援をする私共関係機関がどのような意識をもって関っていくべきか、当事者、家族の方々にどれだけ寄り添い、関わる事が出来るのか。把握した情報を集計・分析、これからの施策に反映し、皆さまと一緒に考えていくきっかけにしたいと考えています。

最後にこの調査を実施するにあたり、関係機関はもとより、ご自身の状況をお伝えいただきました当事者、家族の皆さま等、多くの方にご協力をいただきました。誠にありがとうございました。